

(4) 掘立柱建物跡

SB1(第19図、表3、PL. 9)

位置 調査区北西H16、I16グリッド、標高58.5～58.75mの尾根部平坦面に立地する。本遺構北隣に貯蔵穴SK67、南東方向4.5mにSK68が位置している。

規模と形態 平面形は桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡であり、主軸はN-46°-W、梁桁に囲まれた面積は約7.35㎡である。柱間距離はP1-2:2.45m、P2-3:2.94m、P3-4:2.5m、P4-1:2.96m、柱穴の平面形は直径33～51cm前後の不整円形であり、検出面からの深さは30～48cmを測る。

埋土と遺物の出土状況 埋土は径5mm大の炭化物を含む暗褐色土と黄褐色土に概ね分かれ、P1では直径12～16cmの柱痕が確認された。非掲載であるが、柱穴内からは弥生時代中期後葉の土器小片が出土している。

時期 遺構の時期は、出土土器と埋土の特色から弥生時代中期後葉と考える。

SB2(第20図、表3、PL. 9)

位置 調査区南端H18グリッド、標高58.25～58.5mの尾根平坦面に立地する。東側約1.5mにSI14、約6mにSI13が位置している。

規模と形態 平面形は桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡であり、主軸はN-35°-E、梁桁に囲まれた面積は約2.8㎡である。柱間距離はP1-2:1.81m、P2-3:1.58m、P3-4:1.76m、P4-1:1.54m、柱穴の平面形は直径34～50cm前後の不整円形であり、検出面からの深さは33～51cmを測る。

埋土と遺物の出土状況 埋土は径5mm大の炭化物を含む暗褐色土と黄褐色土に概ね分かれ、P4では直径12～14cmの柱痕が確認された。非掲載であるが、柱穴内からは弥生時代中期後葉の土器小片が出土している。

時期 遺構の時期は、出土土器と埋土の特色から弥生時代中期後葉と考える。

(5) 土坑

SK61(第21図、表12・13・14、写真3、PL.10)

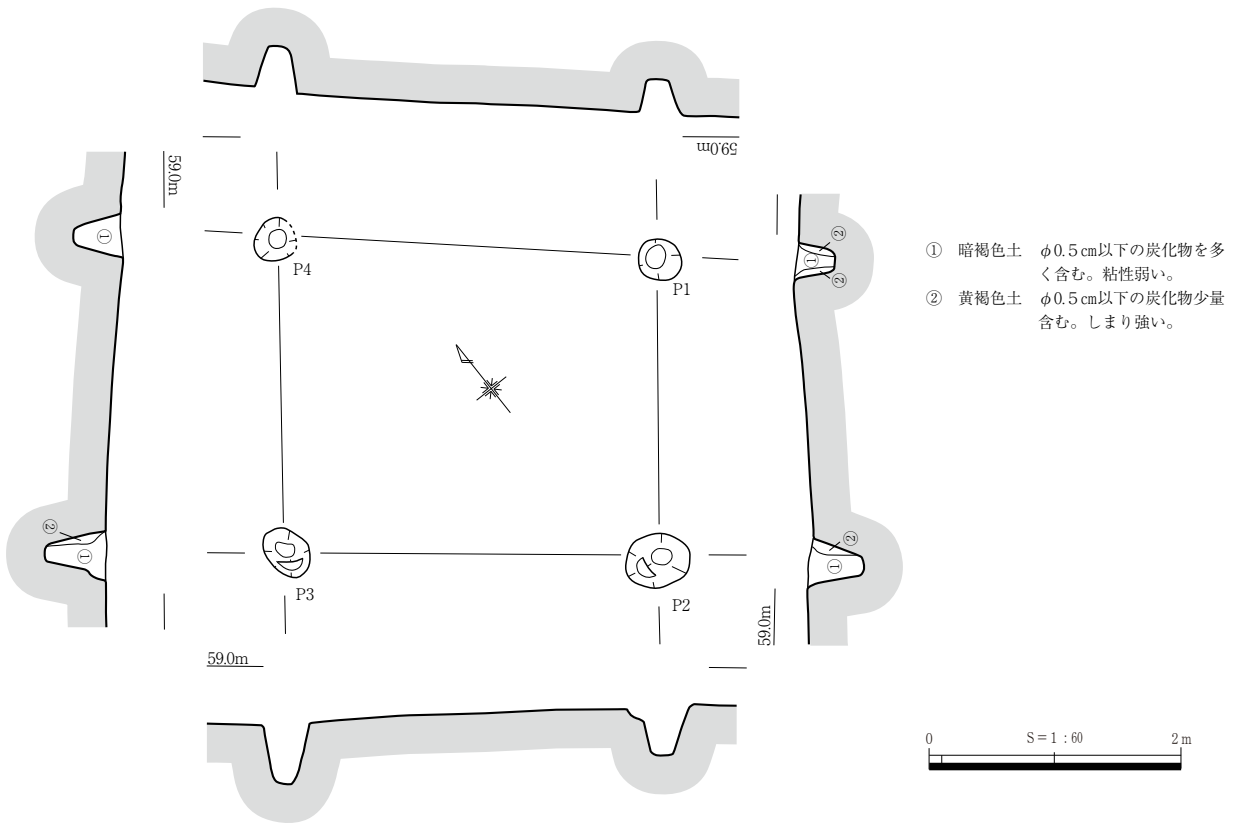
位置 調査区北西H15グリッド、標高59.0mの尾根平坦面に立地し、北西方向約3.4mにSK62が位置している。

調査の経過 Ⅲ層上面において炭化物と焼土が密集する部分を検出し、精査を行ったところ不整楕円形のプランを検出した。炭化材の配置と被熱範囲に留意しながら調査を実施した。

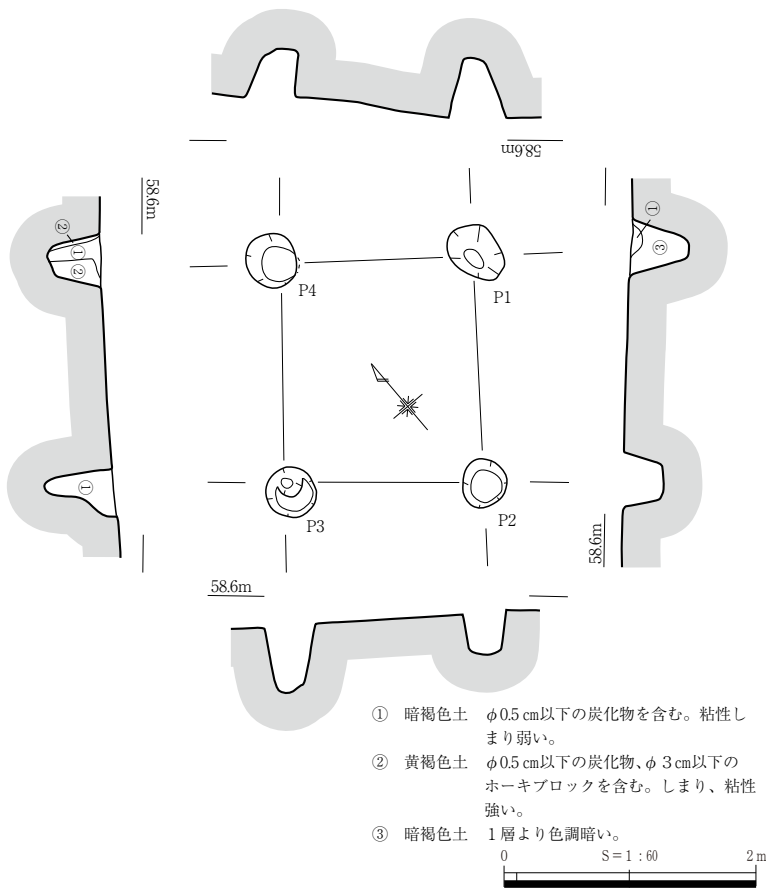
規模と形態 平面形は、長軸1.12m、短軸0.93mの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは10cmで、壁面は40度の角度で外傾して立ち上がる。掘り方は、皿状で、底面は不整円形で平坦となっている。

埋土と遺物の出土状況 埋土は4層に分かれ、1層中で長軸10cm大の炭化材や微細な炭化物・焼土粒が多く確認された。北壁と南壁は硬く焼きしまった赤褐色の被熱面が部分的に認められた。したがって、簡易な「伏せ焼き」法を用いて炭を焼いた製炭土坑であると考えられる。1-B区のSK58も同様に製炭土坑である。

時期 本遺構から出土した炭化材について放射性炭素年代測定と樹種同定を実施している(第4章



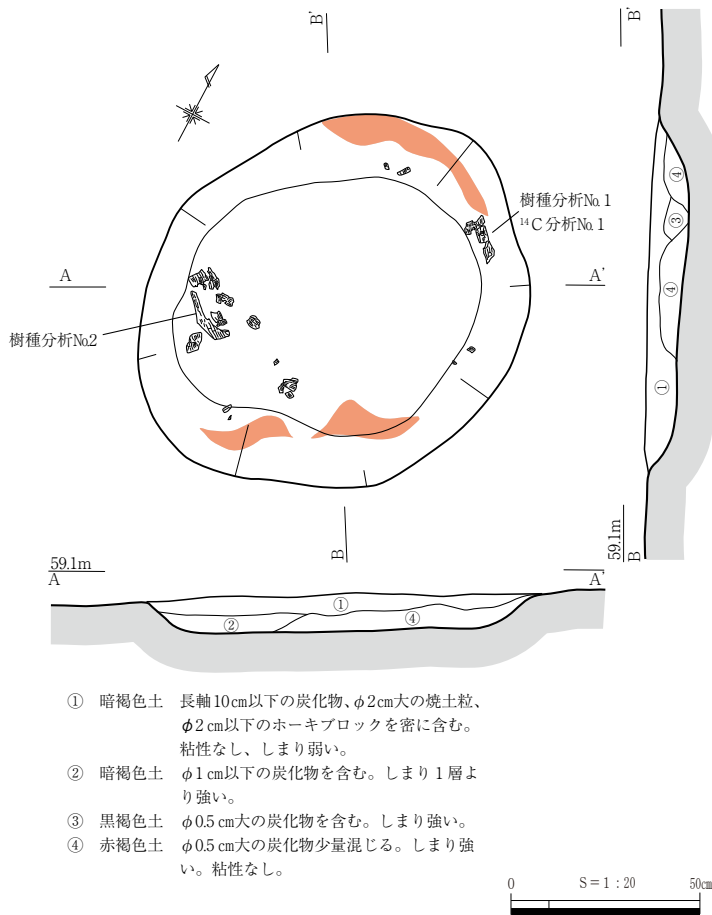
第19図 SB1



第20図 SB2

第1・2節)。その結果、炭化材の年代は 1420 ± 40 年BPとなり、6世紀後半から7世紀代に位置づけられる。また、2点の樹種は落葉広葉樹のクヌギもしくはアベマキの可能性があり、優良な木炭となる樹種として選択的に用いられた可能性が指摘されている。

このような平面形が円形もしくは隅丸方形を呈し、壁面を中心に被熱痕跡を顕著に残す土坑は近年の調査によって増加しており、周辺遺跡では中道東山西山遺跡で14基、久蔵谷遺跡で4基、別所中峰遺跡で8基検出している。遺構の帰属時期は、放射性炭素年代測定を行ったものについては古墳時代から古代にまとまる傾向がある。



第21図 SK61

かれ、大きく上層の暗褐色土と下層の黄褐色土に分かれる。下層は地山と比較的に似た土質であり人為的な埋め戻しの可能性がある。1層中から夥しい土器小片が出土しているため、廃棄土坑の性格を帯びていたものと推定される。

出土遺物 土器は、甕6点、壺1点、高坏2点を掲載している。43・44は口縁部に2条の凹線がめぐり、頸部ナデ、体部ハケ調整が施されている甕である。いずれも内面頸部までヘラケズリは及んでいない。45は口縁部に3条の凹線を引き、肩部にハケ調整後、櫛描波状文を施している。49はラップ状に口縁部が開く壺であり、口縁部に3条の凹線が引かれている。50・51は高坏脚裾部であり、50は脚裾付近に完全に貫通していない三角形透孔が認められる。いずれも裾部に1条の凹線がめぐり。52・53は焼成粘土塊である。53は粗くナデ付けられた表面が残存しているが、その他の面は微細なクラックが認められ破面となっている。

S15・16はサヌカイト製の凹基式石鏃である。S15の表面は側縁からの調整加工が器体中軸まで及んでいるが、裏面は素材面が広く残っている。S16は表裏面に側縁から調整加工を器体中央まで及ばせ断面凸レンズ状に仕上げている。基部寄りには未加工の広いネガ面を残していることから、根挟み部を意図的に作り出した可能性がある。いずれもほぼ同規格の石鏃であり、器体中央に平坦面を有することを基本とするので、S18のような板状剥片を素材としていたと判断される。S18は表裏両面に大きな素材面を残し、両極剥離が加えられたサヌカイト製の石鏃素材剥片である。表面右側面には両極剥離以前の分割面が残っている。S17はサヌカイト製の石錐である。基部に素材面を残し、両側縁からの調整剥離を加えて刃部を作り出している。刃部の作出に当たっては、左側縁の突出部が本来の刃

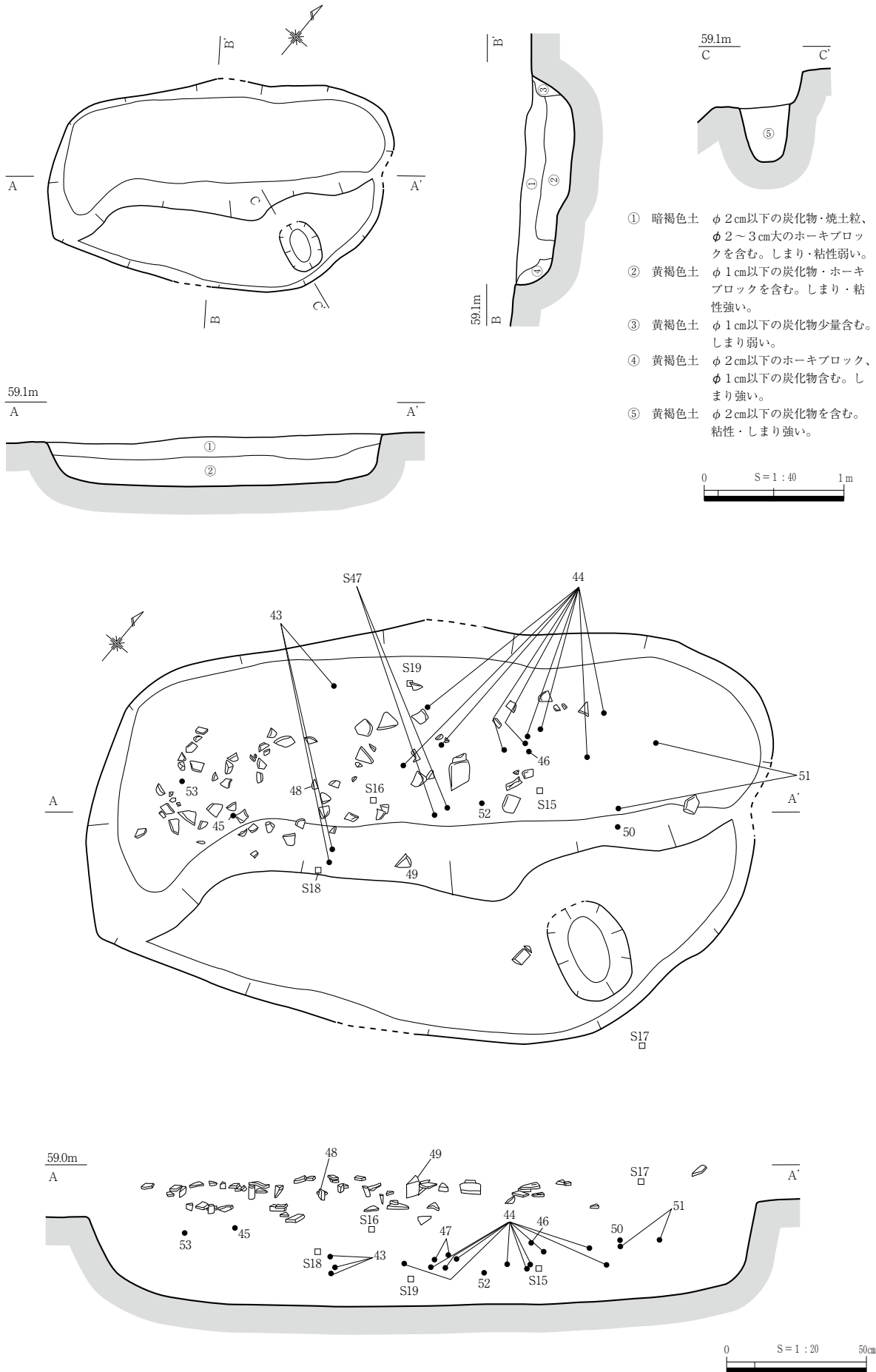
SK62(第22・23図、表5・9・11、PL.11・23)

位置 調査区北西H15グリッド、標高58.75～59.0mの尾根頂部に立地し、南東方向約3.2mにSK61が位置している。

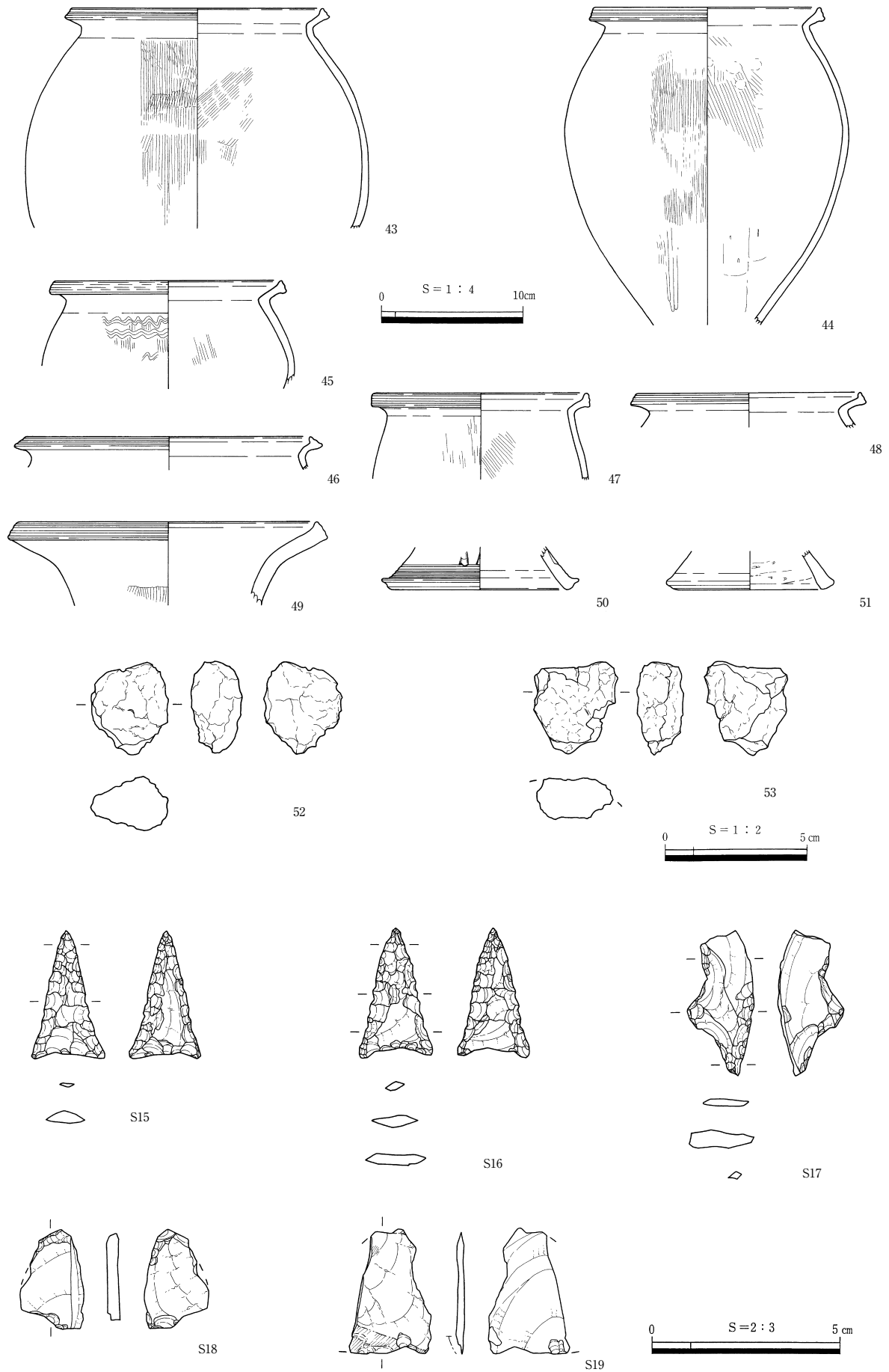
調査の経過 IV層上面において多量の土器小片と炭化物を含む長楕円形のプランを検出し、形態から墓の可能性を想定しながら調査を行った。結果、トレンチ(A-A')により小口など棺の存在を示す痕跡が認められず土坑と判断した。

規模と形態 平面形は長軸2.48m、短軸1.35mの長楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは35cmで、壁面は48度の角度で外傾して立ち上がる。掘り方はⅦ層を掘り込んで底面とし、東半部がテラス状の二段構造となっている。床面東側のテラス部にはP1(35×26-39cm)の1基が確認された。

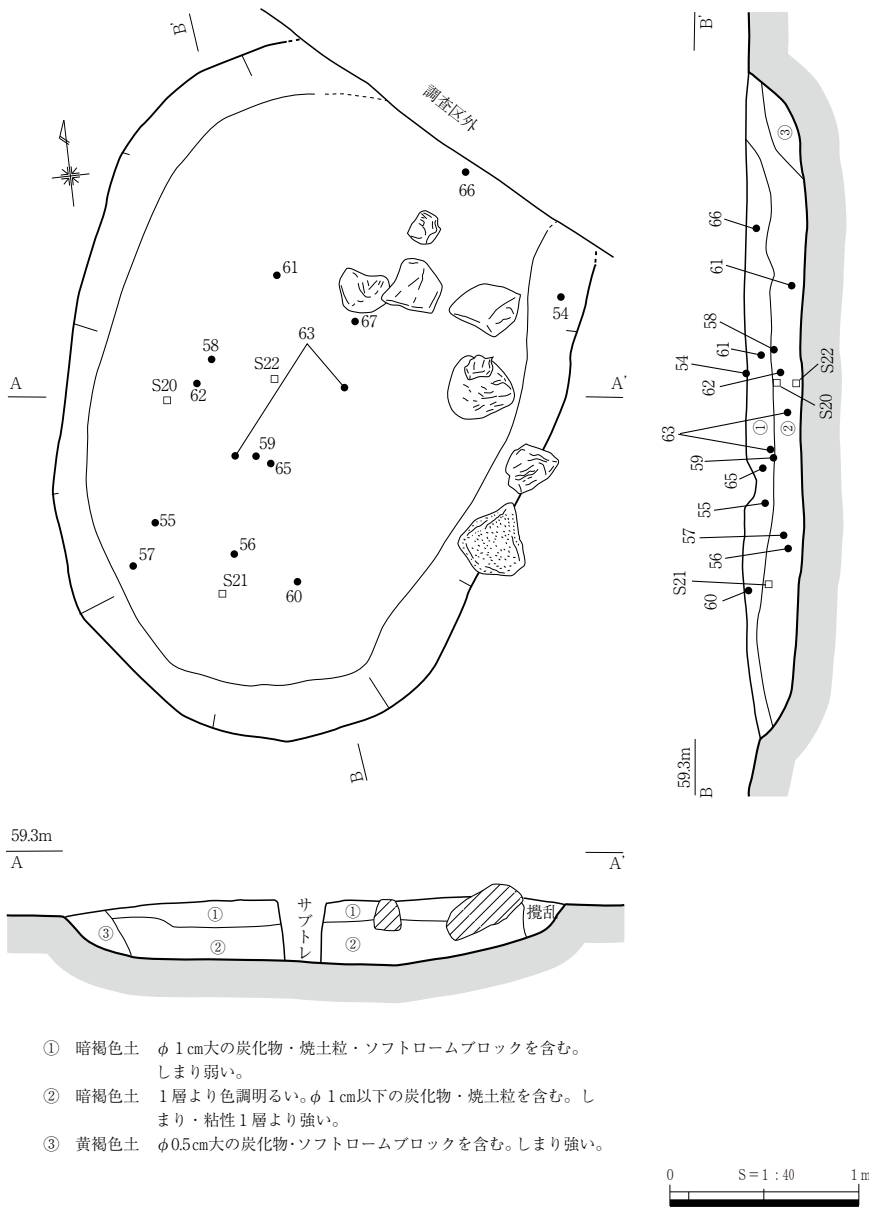
埋土と遺物の出土状況 埋土は4層に分



第22図 SK62



第23図 SK62出土遺物



第24図 SK63

- ① 暗褐色土 φ 1cm大の炭化物・焼土粒・ソフトロームブロックを含む。しまり弱い。
- ② 暗褐色土 1層より色調明るい。φ 1cm以下の炭化物・焼土粒を含む。しまり・粘性1層より強い。
- ③ 黄褐色土 φ 0.5cm大の炭化物・ソフトロームブロックを含む。しまり強い。

部であったものが、製作途中での欠損のため、基部を刃部に作り変えた可能性がある。S19は表面に研磨痕を残すサヌカイト製の剥片である。

時期 遺構の時期は、出土土器がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

SK63(第24・25図、表5・11、PL.12・13)

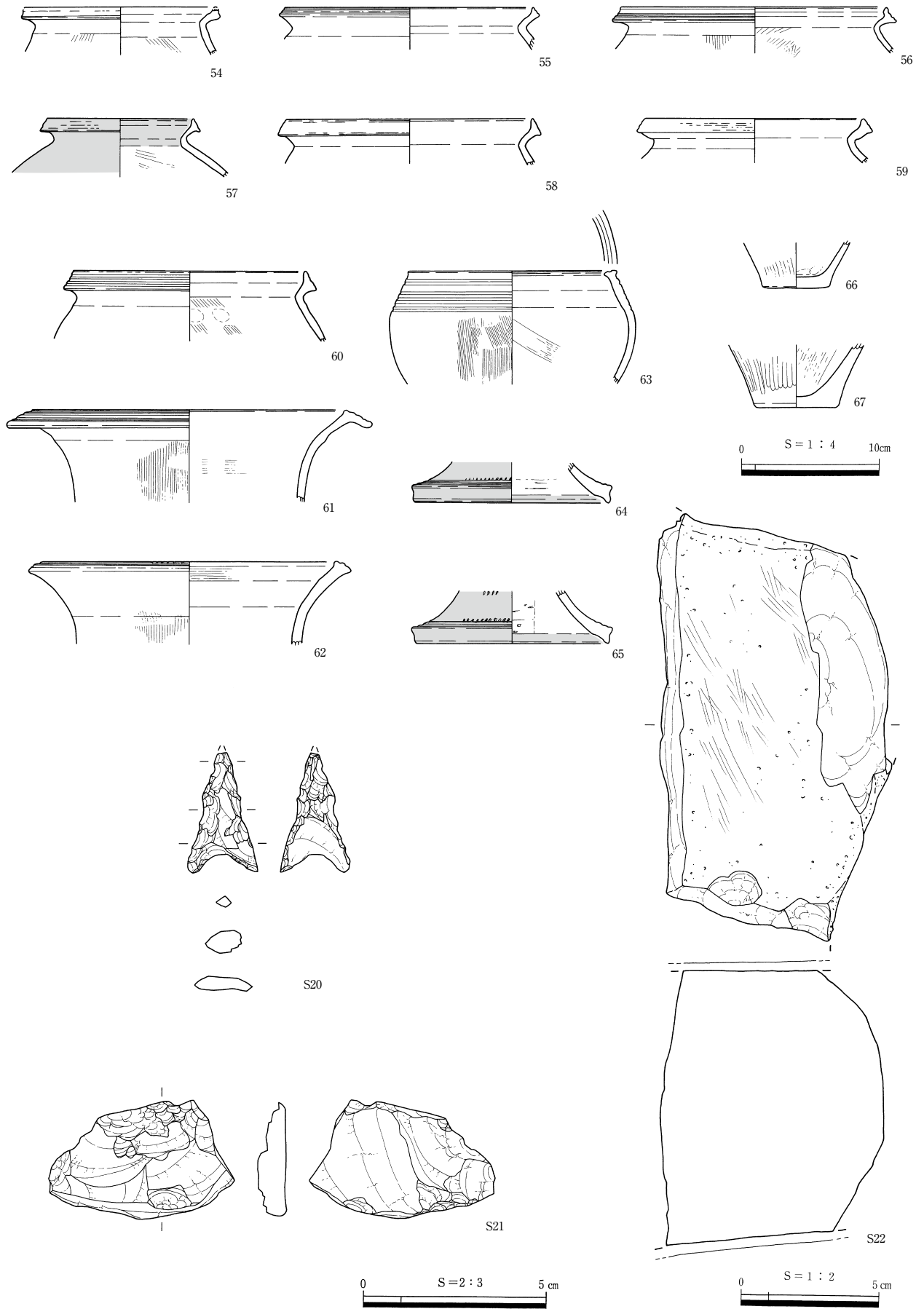
位置 調査区北東G16グリッド、標高59.0～59.25mの尾根頂部に立地し、南西約2.8mにSK66、西側約3.5mにSX16が位置する。

調査の経過 Ⅳ層上面において多量の土器小片や人頭大の礫が含まれた暗褐色土のプランを検出した。検出面において大型礫が点在している状況が確認されたため、墓を想定し精査を行ったが、掘り方や埋土の状況から土坑と判断した。

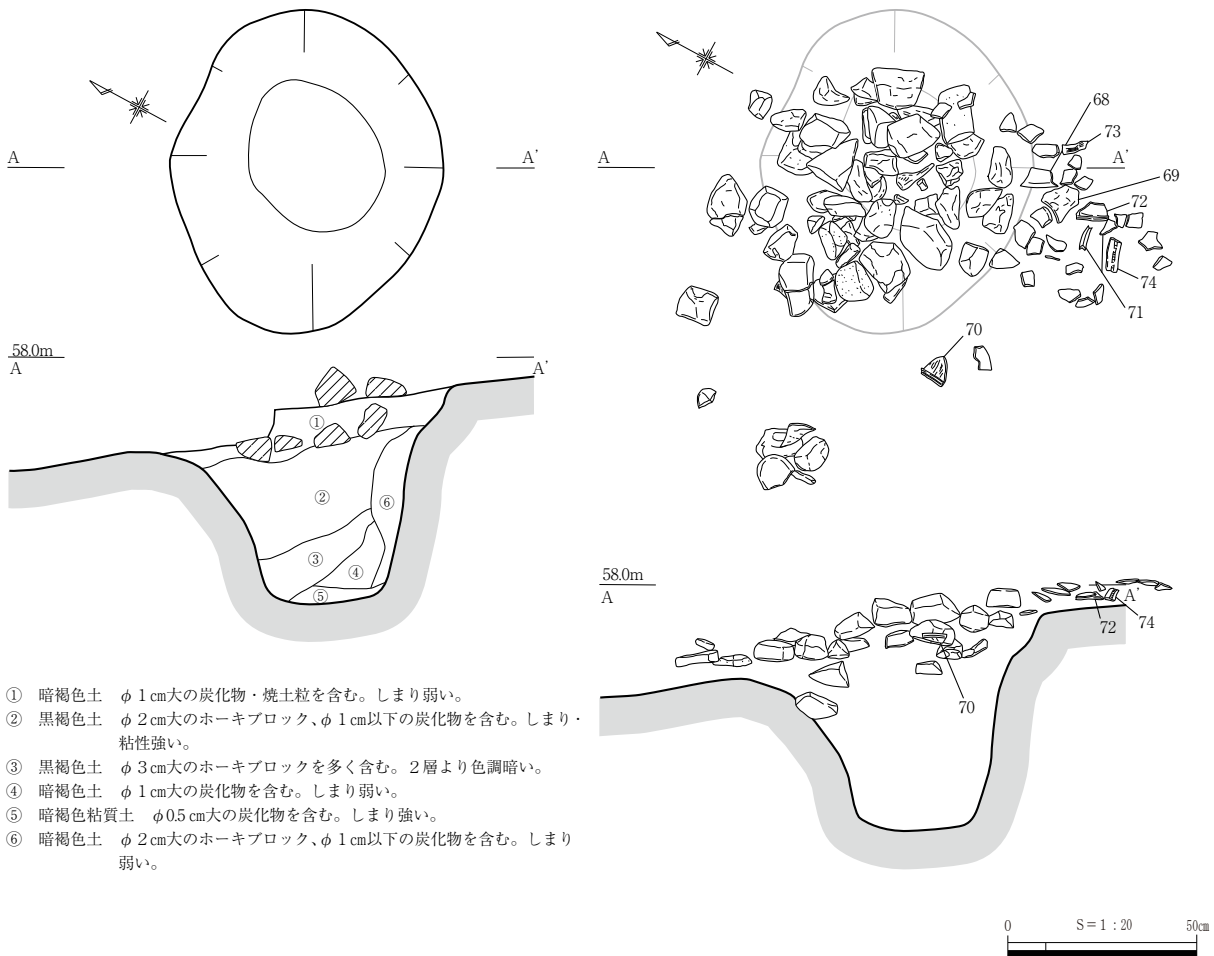
規模と形態 平面形は北側の一部が調査区外に及んでいるため全形は不明であるが、長軸3.8m、短軸2.5mの楕円形を呈するものとする。検出面から底面までの深さは34cmで、壁面は45度の角度で緩やかに立ち上がる。Ⅷ層を底面としており、ほぼ平坦となっている。

埋土と遺物の出土状況 埋土は3層に分かれ、1・2層は炭化物・焼土粒を含む暗褐色土が堆積し、数多くの土器小片と大型礫が認められた。埋土は壁際からの自然堆積と想定されるが、これらの礫や土器などは埋没過程において人為的に廃棄されたものと考えられる。したがって、本遺構は廃棄土坑の性格を帯びていたものと推定する。

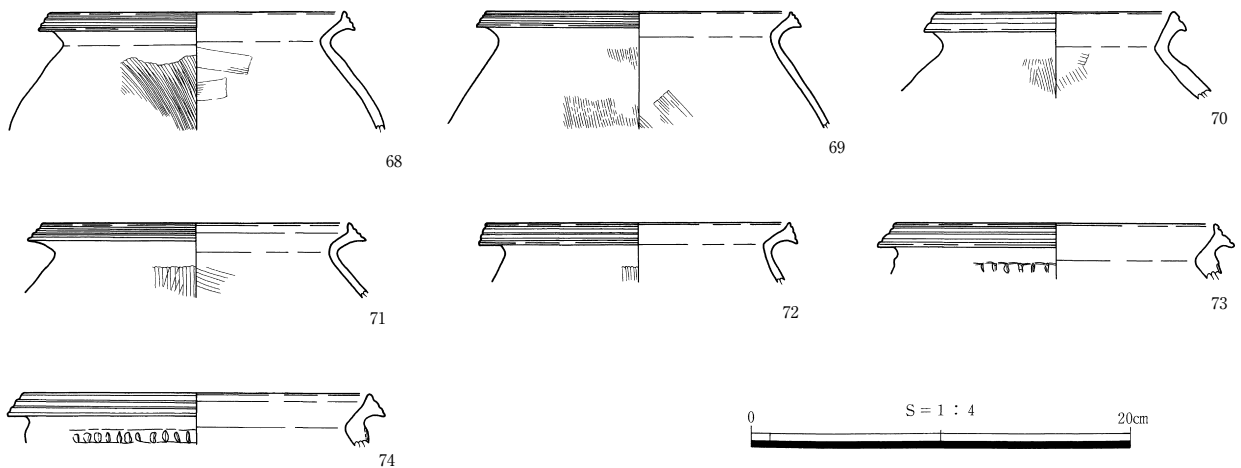
出土遺物 第25図に出土遺物をまとめている。54～60は甕であり、遺存状態は不良である。いずれも口縁部に2～3条の凹線文がめぐり、体部は内外面ともハケ調整が認められる。このうち57は肩部が大きく張った形態であり、内外面赤色塗彩がなされている。61は斜め下方に大きく張り出した口縁部に2～3条の凹線がめぐり、体部は内外面ともハケ調整が認められる。このうち57は肩部が大きく張った形態であり、内外面赤色塗彩がなされている。61は斜め下方に大きく張り出した口縁部に2～3条の凹線がめぐり、体部は内外面ともハケ調整が認められる。63は無頸壺であり、口縁端部に1条、内傾した口縁下に6条の凹線が引かれている。64・65は赤色塗彩が成された高坏脚部である。脚部に刺突文がめぐり、脚裾



第25図 SK63出土遺物



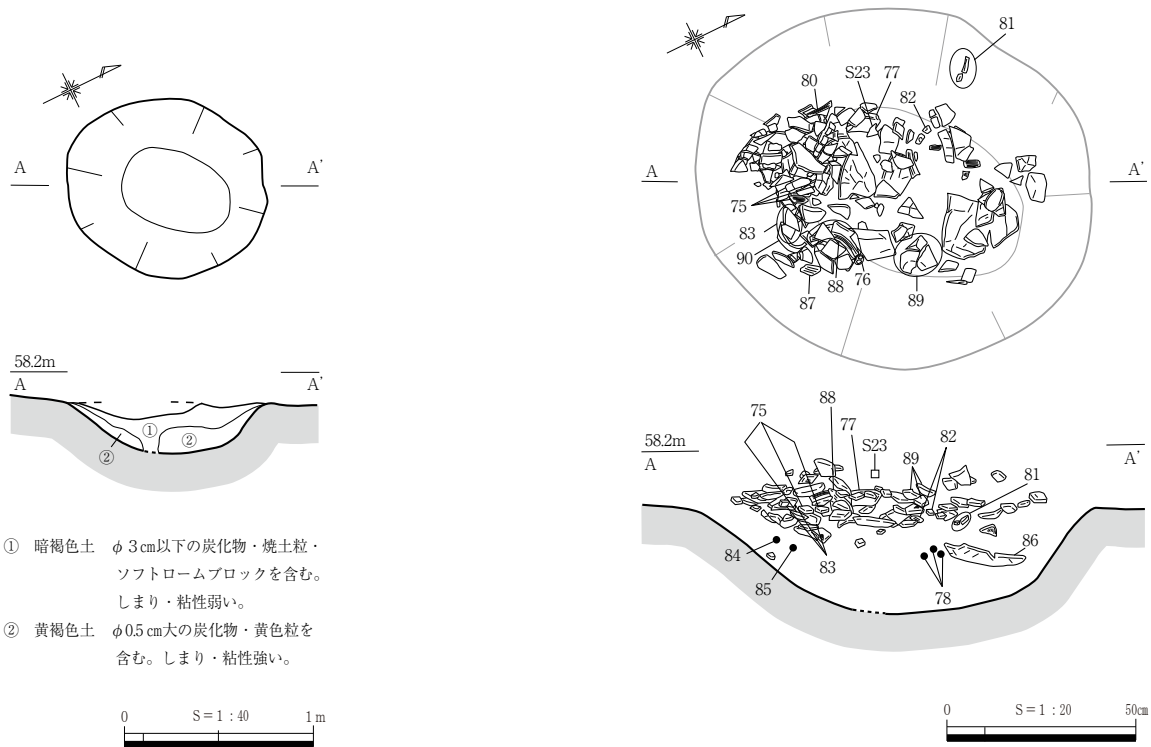
第26図 SK64



第27図 SK64出土遺物

部に1条の凹線がめぐっている。66・67は甕もしくは壺の底部であり、外面はミガキ、内面はハケ・ナデ調整が施されている。

S20は表裏面に素材面を大きく残すサヌカイト製石鏃である。先端部はわずかに欠損し、断面も厚く側縁からの調整加工も粗い。S21は両極剥離が加えられたサヌカイト製の石鏃素材剥片である。下面は両極剥離以前の分割面があり、上下の縁辺につぶれたような階段状剥離痕が見られる。S22は亜角礫を素材とした安山岩製の砥石である。表裏両面とも平滑で擦痕が認められるが、裏面の擦痕は粗い。右側面の一部と左側面、下面は割れ面であり本来はもう少し大きなものであったと考えられる。



第28図 SK65

時期 遺構の時期は、出土土器がIV-1・2様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と想定される。

SK64(第26・27図、表5・6、PL.13・38・40)

位置 調査区南西I18グリッド、標高57.75mの緩斜面上に立地し、南東方向約1mにはSK65が位置している。

調査の経過 谷部の皿層を掘り下げている過程で、焼礫と土器が密集して検出されたため、集石として立ち割りをを行い精査した。その結果、集石下部に土坑が確認されたため集石土坑として位置づけを行った。

規模と形態 平面形は、長軸0.85m、短軸0.72mの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは54cmで、壁面は70度の角度で外傾して立ち上がる。底面はV層を掘り込んでおり、やや湾曲している。

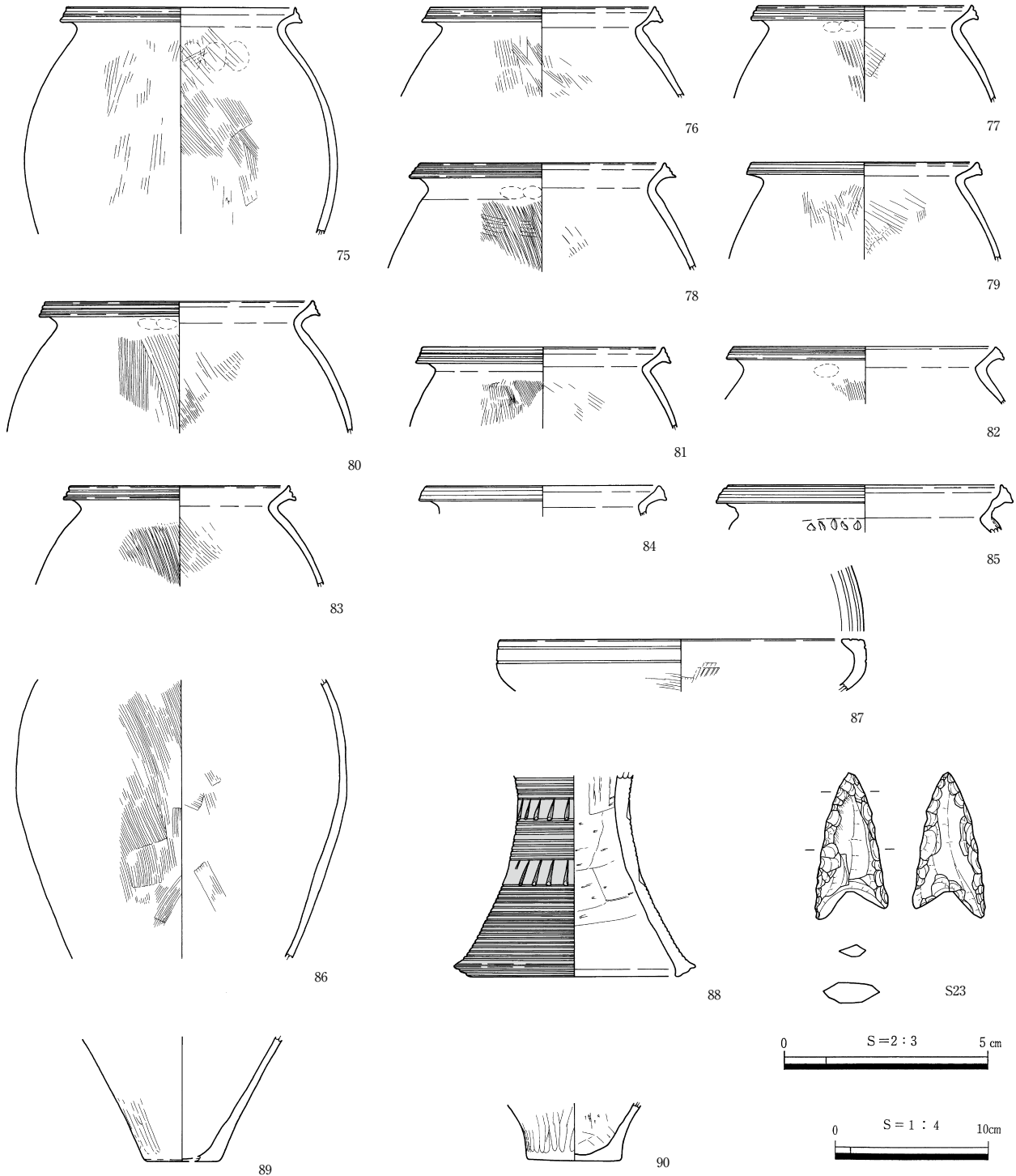
埋土と遺物の出土状況 礫の広がりには長軸80cm、短軸63cmの不整円形を呈し、高低差は34cmを測る。礫は安山岩が主体を占め、表面は被熱酸化して赤褐色を呈し、クラックが認められるものが多い。埋土は6層に分かれ、最上層の1層は多くの炭化物や焼土粒、径10～20cm大の焼礫を包含している。集石の南側には弥生中期後葉の甕が廃棄されている。

出土遺物 本遺構からは甕68～74が出土している。68～72は口縁部に2～3条の凹線が引かれ、頸部ナデ、体部にハケ調整が施される。73・74はこれに加え頸部に刻目貼付突帯が加飾されている。

時期 遺構の時期は、出土土器がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

SK65(第28・29図、表6・11、PL.28・29・38)

位置 調査区南西I18グリッド、標高58.0～58.25mの尾根頂部に立地し、北西方向約1mにSK64が



第29図 SK65出土遺物

位置している。

調査の経過 IV層上面において多量の土器と炭化物を含む楕円形のプランを検出した。土器が重層している状況であったため、面的に記録をとりながら掘り下げを実施した。

規模と形態 平面形は長軸1.06m、短軸0.93mの楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは27cmで、壁面は35度の角度で緩やかに外傾して立ち上がる。掘り方はⅦ層を掘り込んで底面とし、湾曲している。

埋土と遺物の出土状況 埋土は2層に分かれ、壁際からの流入による自然堆積と考えられる。最上層

の暗褐色土中から夥しい土器が出土している。土器は甕類を中心として5面にわたって出土している。いずれも完形に復元できるものではなく、部分的に欠損している。また、表面には煤などが付着していることなどから、使用後に廃棄されたものと推定される。

出土遺物 多量の出土遺物のうち、甕75～86、高坏87・88を図示している。甕75～85は2～3条の凹線を口縁帯にめぐらせ、肩～体部にかけてハケ調整を施す。内面は口縁～頸部はナデ、体部はハケ調整が認められる。このうち85は頸部に刺突を施した突帯が貼り付いている。87・88は高坏の坏部と脚部である。87は肥厚した口縁端部に2条、口縁直下に2条の沈線がめぐっている。88は脚部に2段の三角形擬似透孔を配し、その間隙に多数の沈線文が引かれる。脚裾部にも2条の凹線があり、外面は赤色塗彩が施される。

S23はやや身厚なサヌカイト製石鏃である。表裏面は両側縁からの調整剥離が加えられるが、中心部には大きく素材面が残っている。表面の素材面には研磨痕が認められる。

時期 出土土器がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

SK66(第30～32図、表11・6、PL.30・31・39)

位置 調査区北東G16グリッド、標高58.8mの尾根頂部に立地し、北西方向約3mにSX16が位置している。

調査の経過 Ⅳ層上面において多量の土器と炭化物を含む楕円形のプランを検出した。土器が重層して堆積している状況であったため、面的に記録をとりながら掘り下げを実施した。

規模と形態 平面形は長軸1.13m、短軸1.1mの不整形円形を呈している。検出面から底面までの深さは23cmで、壁面は50度の角度で緩やかに外傾して立ち上がる。掘り方はⅥ層を掘り込んで底面とし、湾曲している。

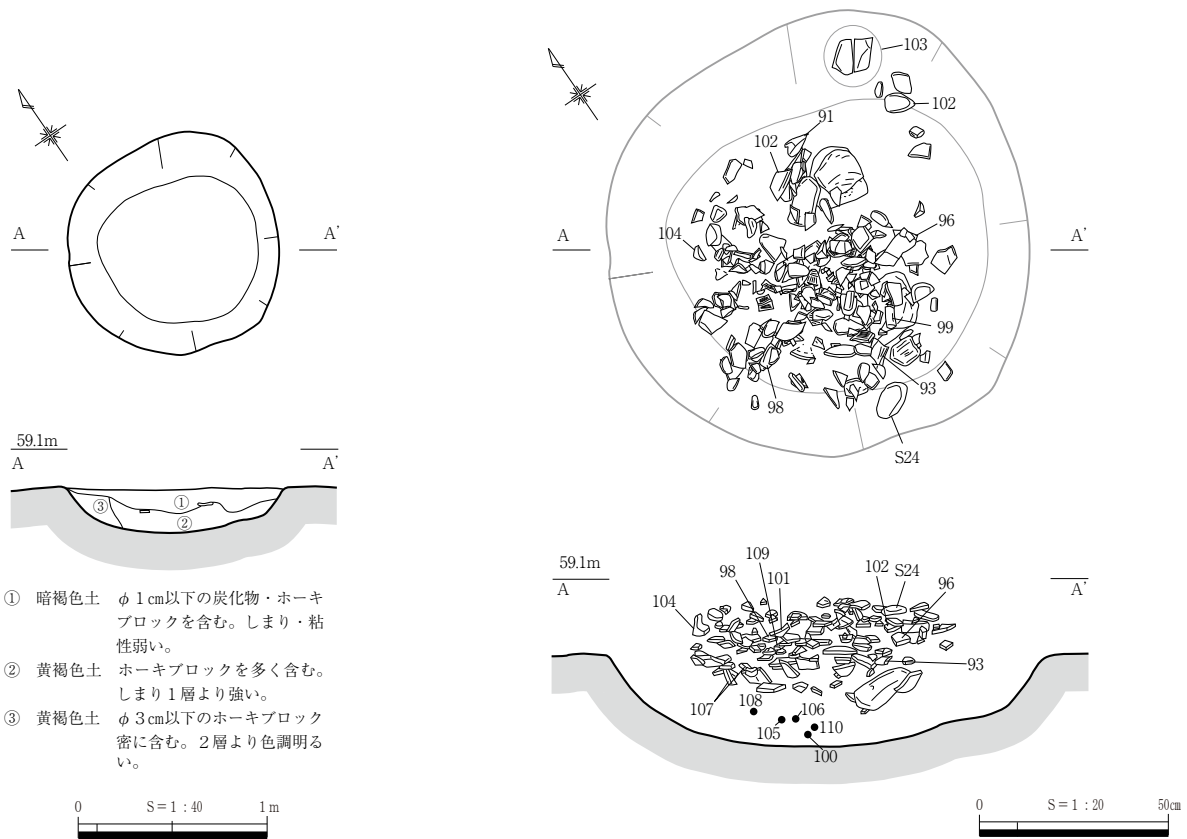
埋土と遺物の出土状況 埋土は3層に分かれ、いずれも壁際からの自然堆積と考えられる。最上層の暗褐色土中から夥しい土器が出土している。土器は甕を中心として4面にわたって出土し、いずれも完形に復元できるものではなく、部分的に欠損している。また、表面には煤などが付着していることなどから、使用後に廃棄されたものと推定される。

出土遺物 91～100は甕、101～104は壺、105～110は高坏である。甕の一群は口縁部に2～3条の凹線を有し、体部にハケ調整が施されることで共通するが、96～100は指頭圧痕貼付突帯がめぐる。

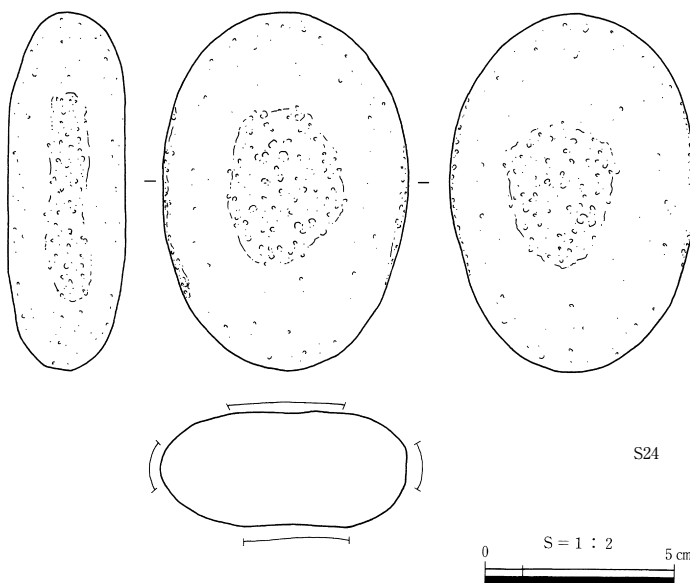
また、96は口縁部に円形浮文が付くことで他とは異なる特徴を持っている。101・102・104は壺の口縁から頸部に該当し、口縁端部に2～3条の凹線、頸部はタテ方向のハケ調整が施される。103は壺の頸部から肩部に該当し、頸部に4条の凹線が引かれている。105～107は口縁直下に2～3条の凹線がめぐる高坏坏部である。109は口縁を水平方向に屈曲させる高坏坏部であり、端部に1条の凹線が見られる。110は高坏脚部であり、完全に貫通していない三角形透孔を配し、その下部に13条の沈線文が引かれている。

S24は扁平な楕円形礫を素材とした敲石であり、表裏面の中央と左右両側面に敲打痕が見られる。いずれの敲打痕も浅く使用の頻度も少なかったと考えられる。

時期 遺構の時期は、出土土器がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。



第30図 SK66



第31図 SK66出土遺物(1)

SK67(第33・34図、PL.15・32)

位置 調査区北西H15・16グリッド、標高58.5～58.75mの尾根部平坦面に立地し、南隣にSB1が位置している。

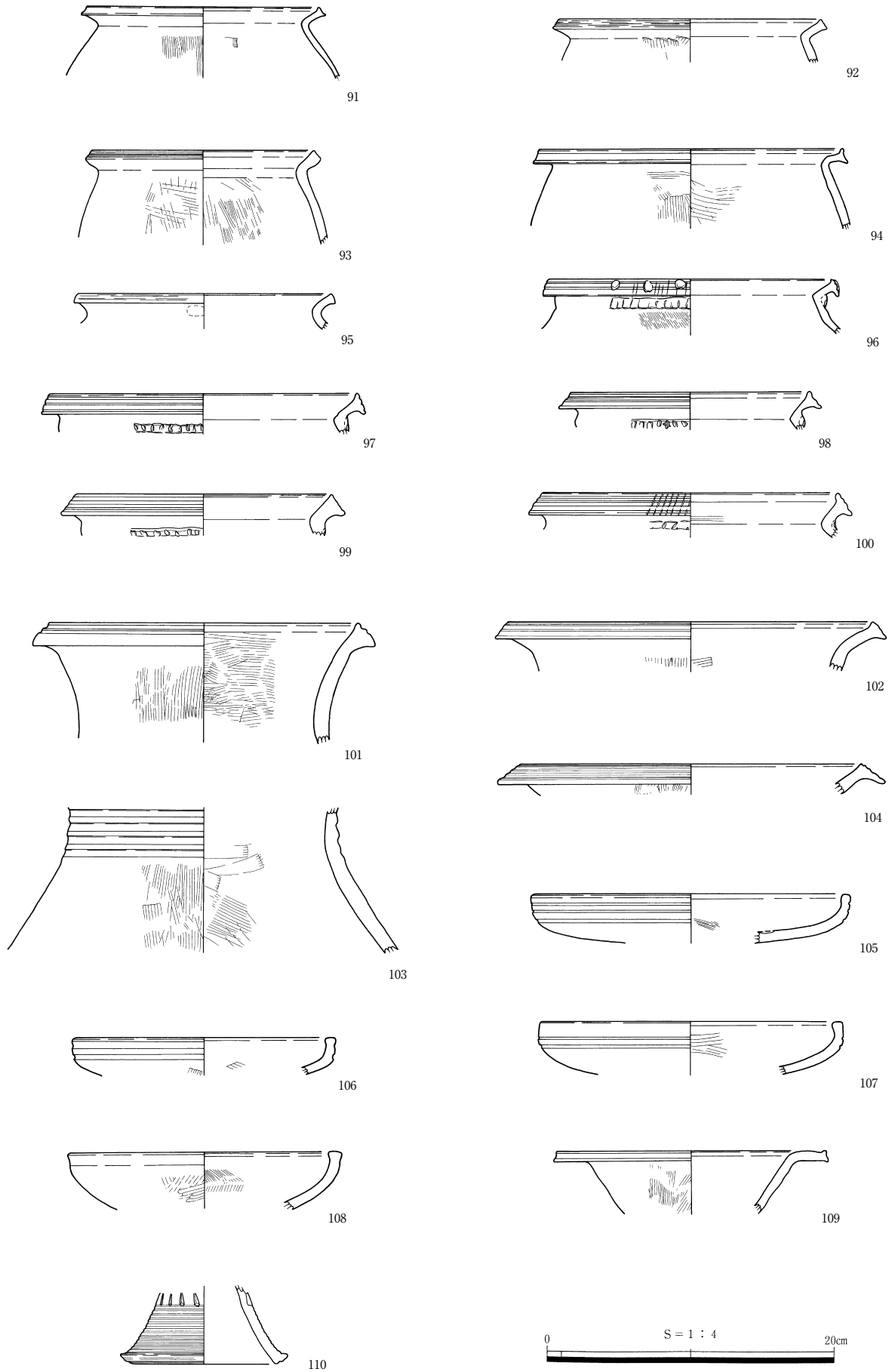
調査の経過 IV層上面において、微細な炭化物を含む暗褐色土の不整楕円形のプランを検出した。サブトレンチによってやや括れた下部から底部がさらに広がることがわかり、貯蔵穴の可能性が高いと判断し調査を進めた。

規模と形態 検出規模は開口部で長軸1.95m、短軸1.64mで、検出面から底面までの深さは86cmである。掘り方は断面

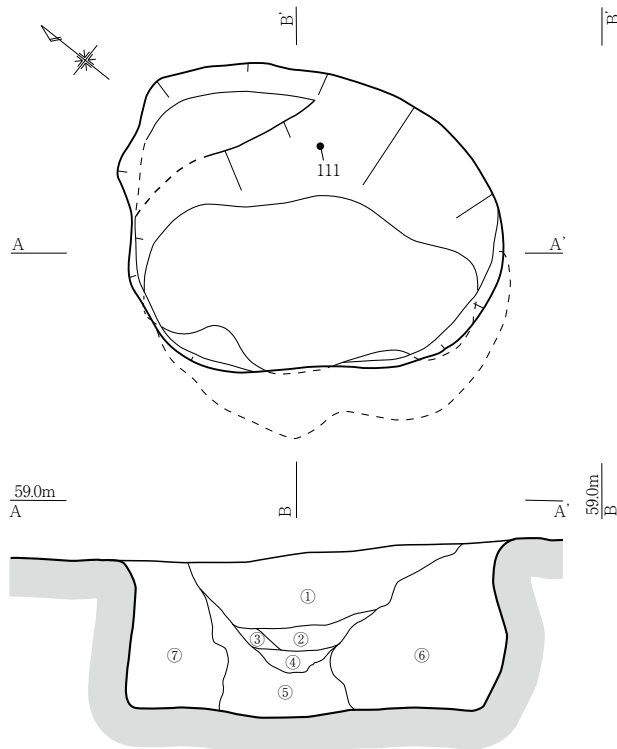
上半の内側に括れる部分が東から南壁において認められ、フラスコ状を部分的に呈している。VIII層を掘り込んで底面としており、ほぼ平坦となっている。以上から、本遺構は貯蔵穴と想定される。

埋土と遺物の出土状況 埋土は6層に分層できるが、中心部は主に炭化物を含む暗褐色土、壁際がホーキブロックなどの地山を含む黄褐色土が堆積する。壁際が大きく崩落し、中心部の窪みに土器などが流れ込んでいる状況から、埋土は自然堆積と想定される。遺物は1層に主に含まれており、総じて少ない。

出土遺物 遺物は甕1点を図示している。口縁部に3条の凹線が見られ、頸部に刻目貼付突帯がめぐっ

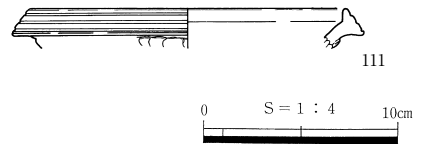
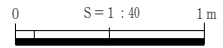


第32図 SK66出土遺物(2)

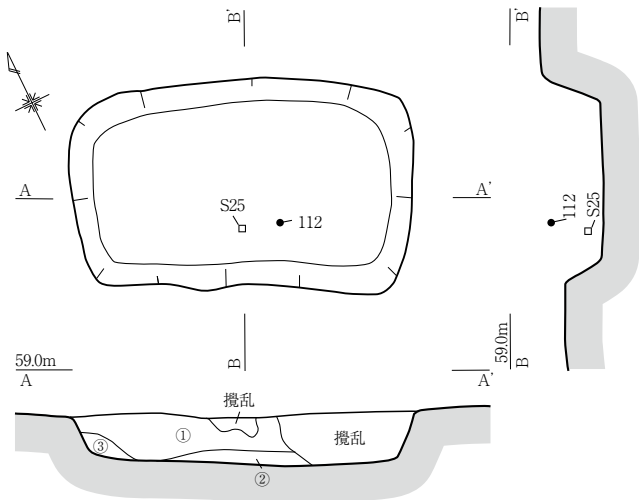


第33図 SK67

- ① 暗褐色土 φ1cm大の炭化物、黄色粒を含む。しまり・粘性弱い。
- ② 暗褐色土 φ0.5cm以下の炭化物、φ2cm以下のソフトロームブロックを含む。しまり弱い。
- ③ 黄褐色土 φ1cm大の炭化物少量含む。粘性強い。
- ④ 黄褐色土 φ0.5cm以下の炭化物少量含む。粘性強い。
- ⑤ 橙褐色土 φ1cm大の黄色スコリア、φ0.5cm以下の炭化物少量含む。しまり・粘性強い。
- ⑥ 黄褐色土 φ0.5cm大の炭化物、φ3cm以下のホーキブロックを含む。しまり強い。
- ⑦ 橙褐色土 φ0.5cm以下の炭化物少量含む。しまり・粘性強い。

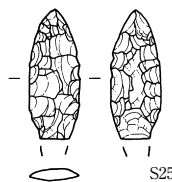
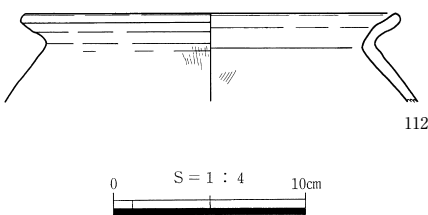
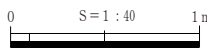


第34図 SK67出土遺物



第35図 SK68

- ① 暗褐色土 φ1cm以下の炭化物を多く含む。φ1cm大のホーキブロックを含む。しまり・粘性弱い。
- ② 明黄褐色土 φ0.5cm以下の炭化物を含む。しまり・粘性強い。
- ③ 黄褐色土 φ3cm以下のホーキブロックを含む。しまり・粘性強い。



第36図 SK68出土遺物

ている。

時期 遺構の時期は、出土遺物がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

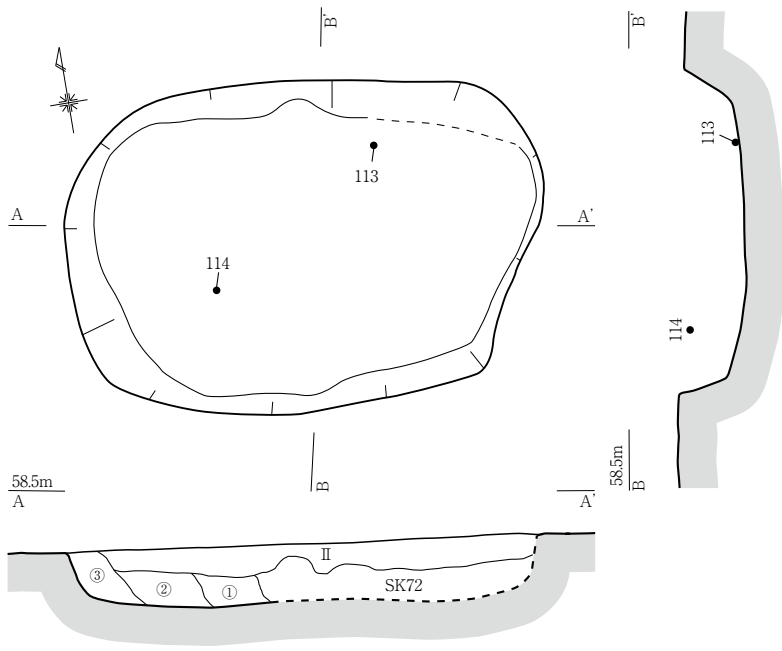
SK68(第35・36図、PL.15・32・38)

位置 調査区中央H16グリッド、標高58.75mの尾根部平坦面に立地し、南東側約1.5mにはSI12が位置している。

調査の経過 IV層上面において炭化物を多く含む暗褐色土の隅丸長方形のプランを検出した。平面形から墓の可能性を想定して調査を実施したが、土層断面や底面から小口など棺の存在を示す痕跡が認められなかったことから、土坑と判断した。

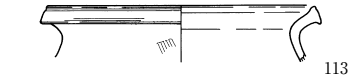
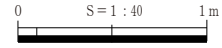
規模と形態 平面形は長軸1.31m、短軸1.1mの隅丸長方形を呈している。検出面から底面までの深さは28cmで、壁面は70度の角度で外傾して立ち上がる。底面はVII層を掘り込んでおり、ほぼ平坦となっている。

埋土と遺物の出土状況 埋土は3層に分か

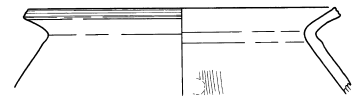


第37図 SK69

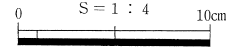
- ① 黄褐色土 φ 0.5 cm以下のホーキブロックを含む。粘性・しまり弱い。
- ② 暗褐色土 φ 0.5 cm以下の炭化物を含む。
- ③ 暗褐色土 φ 1 cm以下の炭化物、φ 3 cm以下のホーキブロックを含む。しまり・粘性弱い。



113



114



第38図 SK69出土遺物

れ、東側の三分の一ほどに木の根攪乱が及んでいた。1層中に径1 cm大の炭化物やホーキブロックが含まれており、壁際からの自然流入と考えられる。遺物は1層中から出土しているが、総じて少ない。

出土遺物 112は口縁部が風化により調整不明であるが、体部にハケ調整が見られる甕である。S25はサヌカイト製の有茎石鏃である。表面は器体中央まで調整加工を施し、裏面は中央に素材面を残している。

時期 遺構の時期は、出土遺物がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

SK69(第37・38図、表6、PL.16・32)

位置 調査区中央南寄りH17グリッド、標高58.0～58.25mの尾根部平坦面に立地し、東半をSK72に切られている。北側約1 mにはSI12が位置している。

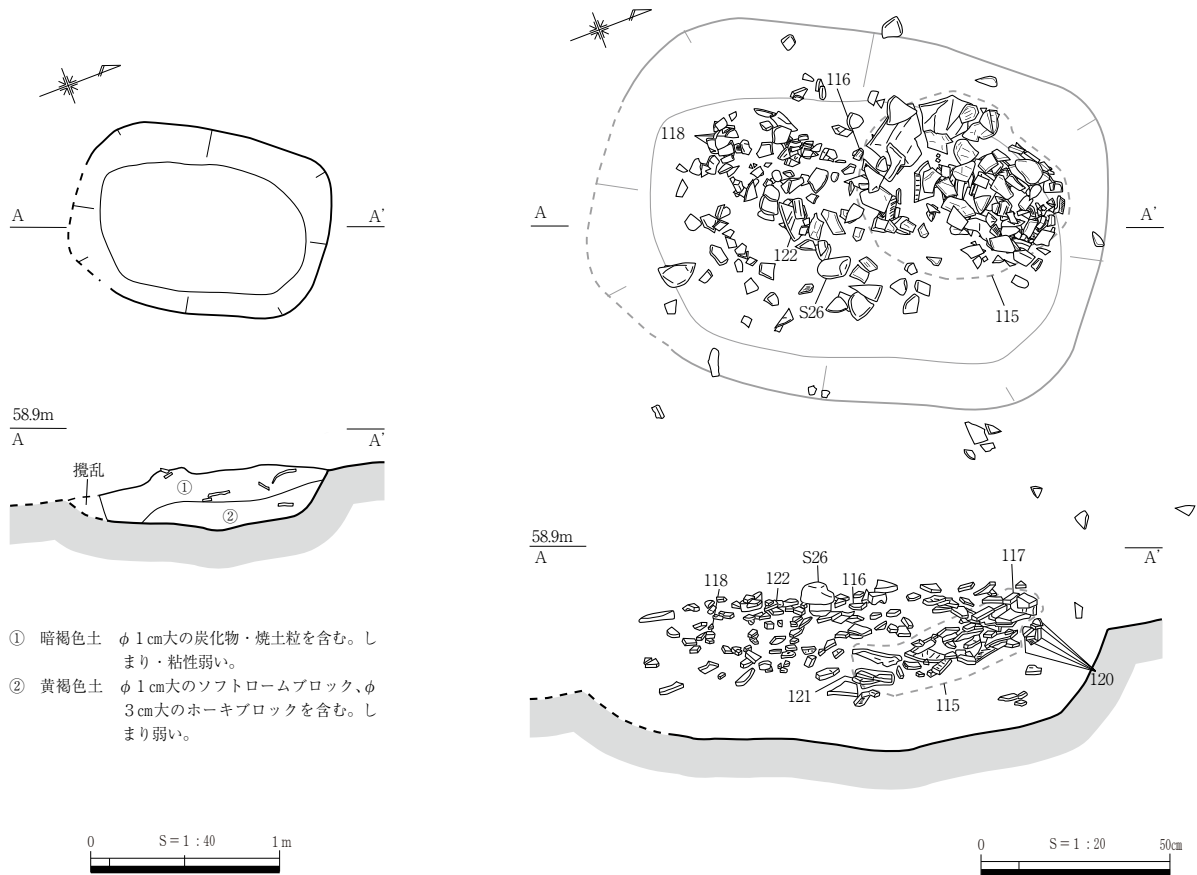
調査の経過 Ⅲ層上面において、炭化物を多く含んだ不整楕円形のプランを検出したため、土坑として調査を行った。

規模と形態 平面形は長軸2.5m、短軸1.77mの楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは34 cmで、壁面は70度の角度で外傾して立ち上がる。底面はⅥ層を掘り込んでおり、ほぼ平坦となっている。

埋土と遺物の出土状況 埋土は3層に分かれ、壁際からの自然流入と考えられる。埋没過程において、SK72が掘削されたものと考えられる。遺物は総じて少ない。

出土遺物 甕113・114を図示している。いずれも風化により不明な点が多いが、口縁部に2条前後の凹線を持ち、肩部にハケ調整が認められる。

時期 遺構の時期は、出土遺物がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。



第39図 SK70

SK70(第39・40図、表6・7・11、PL.16・17・32)

位置 調査区中央H17グリッド、標高58.5～58.75mの尾根頂部に立地し、西側約30cmにSI12が位置する。

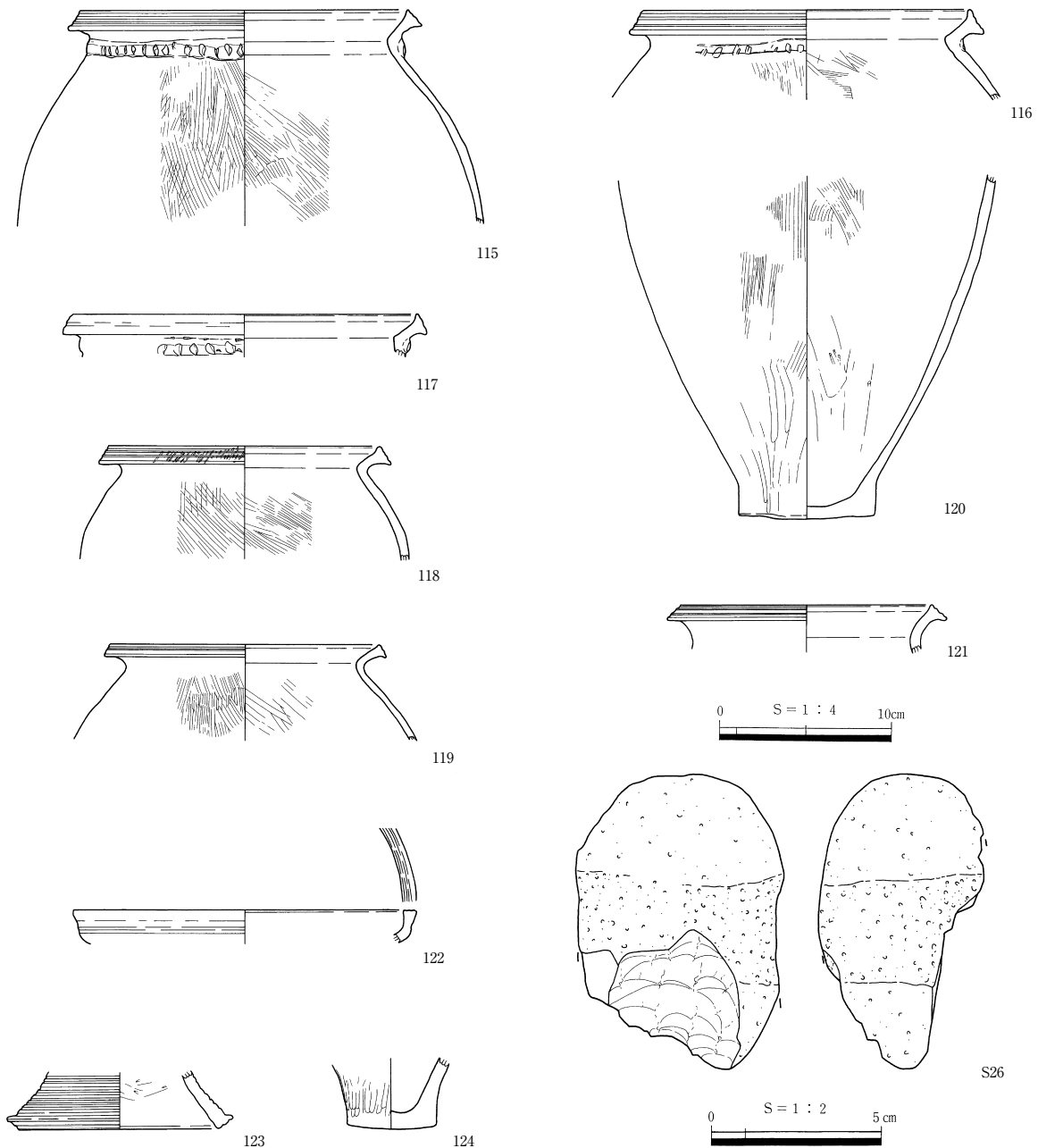
調査の経過 IV層上面において多量の土器や炭化物が含まれた暗褐色土のプランを検出した。切り株の根によって部分的な攪乱を受けている。土器が重層して堆積している状況であったため、面的に記録をとりながら掘り下げを実施した。

規模と形態 平面形は長軸1.36m、短軸0.98mの隅丸長方形を呈している。検出面から底面までの深さは34cmで、壁面は60度の角度で緩やかに立ち上がる。VII層を底面としており、ほぼ平坦となっている。

埋土と遺物の出土状況 埋土は2層に分かれ、壁際からの自然堆積と考えられる。1層暗褐色土を中心に数多くの土器が含まれることから、土坑の埋没過程において人為的に廃棄されたものと考えられる。

出土遺物 115～119は口縁帯に2～3条の凹線が引かれ、頸部の貼付突帯に小口状の工具で連続刺突が施される。118・119・121は2～3条の凹線を口縁部にめぐらす甕の口縁～肩部破片である。体部内外面のハケ調整は比較的良好に観察できる。120は甕の体部から底部であり、内面のヘラケズリは体部下半に留まっている。122は口縁端部及び口縁直下に2条の凹線がめぐる高坏坏部である。123は高坏脚部であり、脚裾部に多条平行沈線が引かれている。

S26は楕円形礫の器体中央に網掛け溝を作り出した瀬戸内型石錘である。下半部が欠損している。



第40図 SK70出土遺物

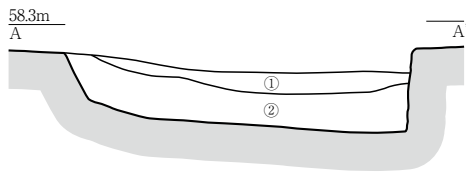
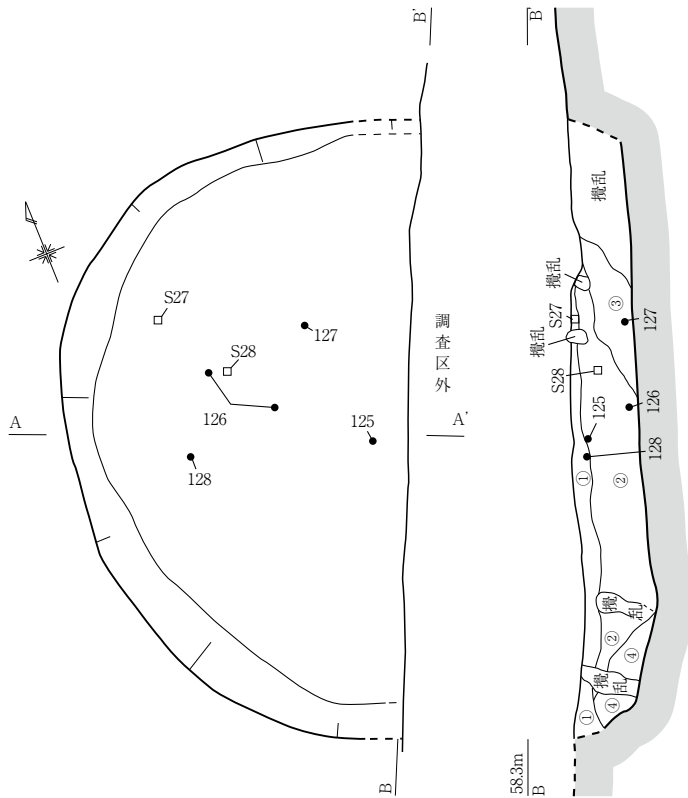
時期 遺構の時期は、出土土器がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と想定される。

SK71(第41・42図、表7・11、PL.32・38・39)

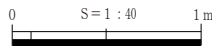
位置 調査区東端G17・18グリッド、標高57.75～58.0mの緩斜面上に立地し、南西側1mにはSI13が位置している。遺構のほぼ半分が調査区外に及んでいるため、全体形状は不明である。

調査の経過 Ⅳ層上面において、弥生土器が集中して出土する範囲を検出し、竪穴建物の可能性も視野に入れながら精査を行った。柱穴や焼土面などが検出されなかったため、土坑として判断し調査を行った。

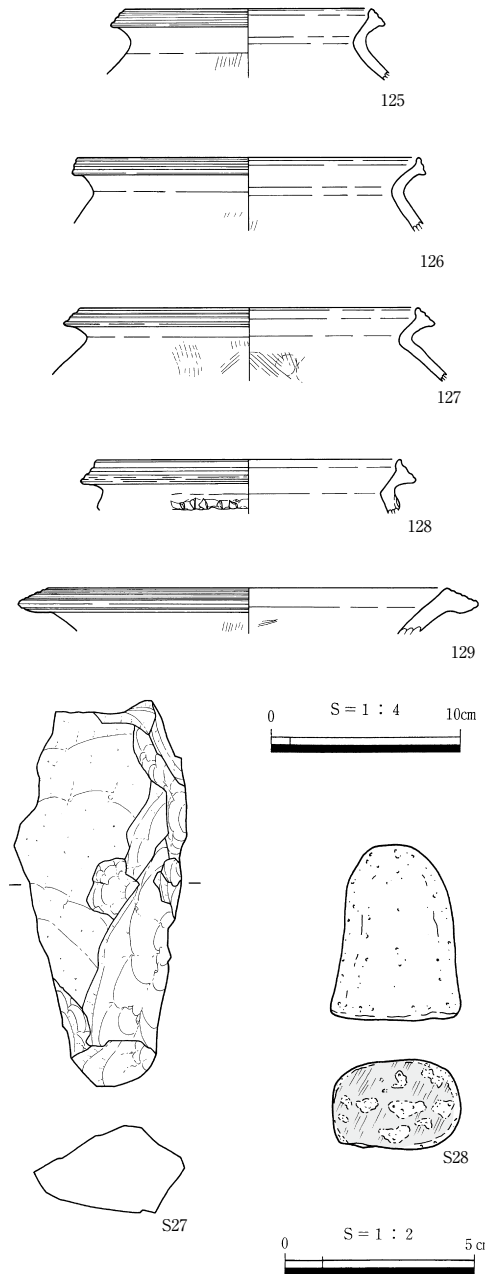
規模と形態 平面形は現況で長軸3.25m、短軸1.85mの不整円形であるが、全体形状はほぼ東西方向に主軸を有する楕円形と想定される。検出面から底面までの深さは38cmで、壁面は60度の角度で外傾



- ① 暗褐色土 φ 1 cm以下の炭化物・焼土粒、φ 2 cm大のホーキブロックを含む。粘性・しまり弱い。
- ② 暗褐色土 φ 2 cm以下の炭化物・焼土粒・ソフトロームブロック・ホーキブロックを含む。粘性・しまり弱い。1層より色調明るい。
- ③ 黄褐色土 φ 5 cm大のホーキブロック、φ 1 cm以下の炭化物を含む。しまり弱い。
- ④ 黄褐色土 φ 0.5 cm大の炭化物・焼土粒・ソフトロームブロックを含む。しまり弱い。



第41図 SK71



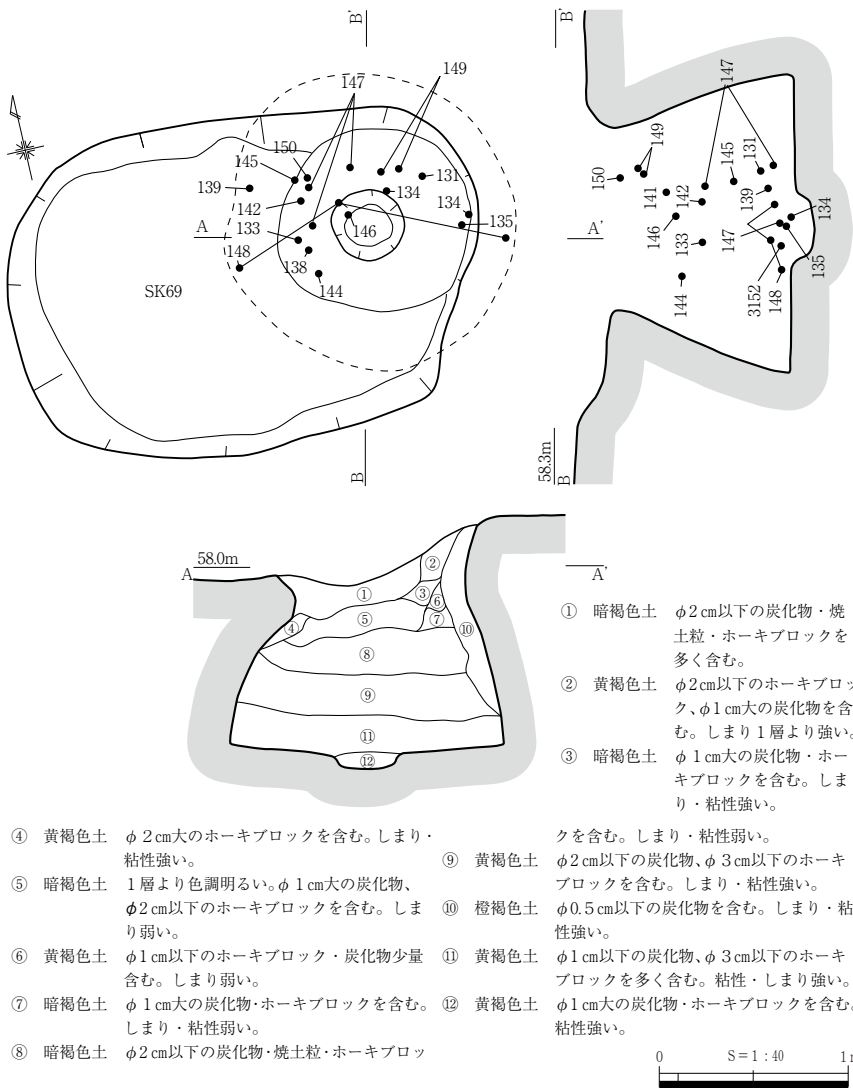
第42図 SK71出土遺物

して立ち上がる。V層を掘り込んでおり、底面はほぼ平坦となっている。

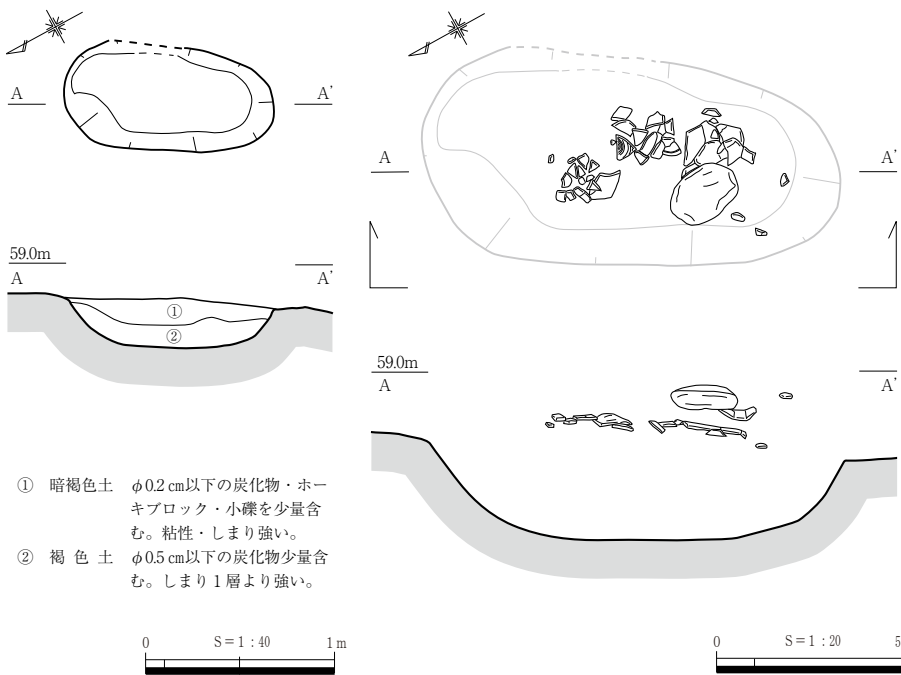
埋土と遺物の出土状況 埋土は4層に分かれ、1・2層の暗褐色土中に土器小片が多く認められた。北壁寄りには木の根による部分的な攪乱を受けている。埋土は壁際からの自然堆積と考えられる。

出土遺物 125～128は甕の口縁～肩部破片である。口縁部は2～3条の凹線が引かれ、頸部はナデ、体部はハケ調整である。このうち128は小口状の工具により刺突を施した突帯が貼付けられている。129は口縁端部が斜め下方向に張り出した壺であり、3条の凹線がめぐる。

S27は二次加工のある桂化木剥片である。板状の桂化木の縁辺に調整加工を施していることから、管玉製作に伴う石針素材の可能性はある。S28は小型の棒状礫を用いた安山岩製の磨石である。磨面



第43図 SK72



第44図 SK73

は棒状礫の割れ面を使用したものと考えられ、部分的に窪みが認められる。

時期 出土土器がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

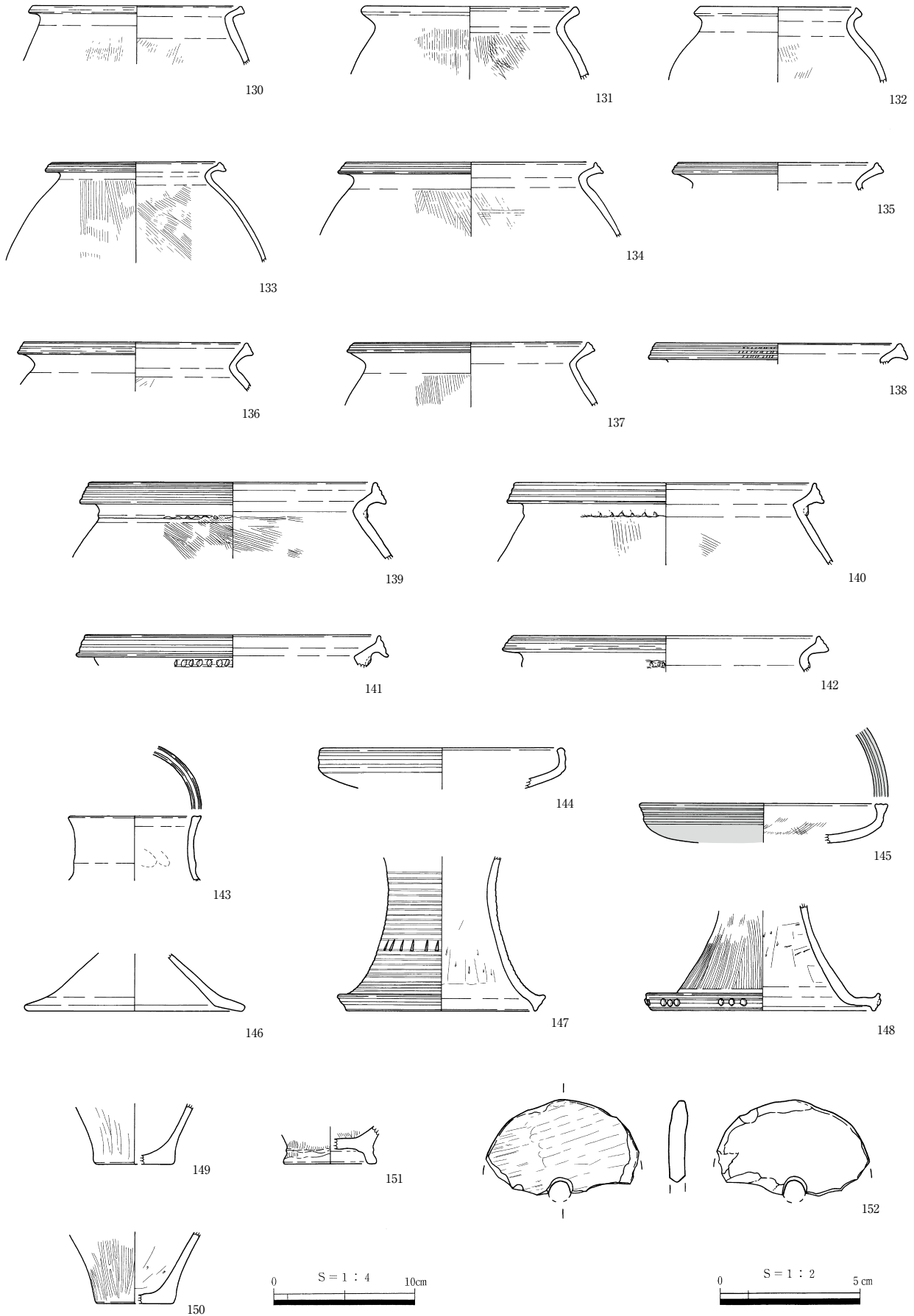
SK72(第43・45図、表7～9、PL.19・33)

位置 調査区中央南寄りH17グリッド、標高58.0～58.25mの尾根部平坦面に立地し、SK69を切っている。北側約1mにSI12が位置している。

調査の経過 SK69を掘り下げている過程で、底面に微細な炭化物を含む暗褐色土の不整円形のプランを検出した。サブトレンチによって開口部から底部に向かって広がることがわかり、貯蔵穴の可能性が高いと判断し調査を進めた。

規模と形態 検出規模は開口部で長軸1m、短軸0.97mで、検出面から底面までの深さは1.2mである。掘り方は断面上半の内側に括れる部分が認められ、フラスコ状を呈している。Ⅷ層を掘り込んで底面としており、中央部に径38cm、深さ10cmのピットが確認された。以上の特徴から、本遺構を貯蔵穴と判断した。

埋土と遺物の出土状況 埋



第45図 SK72出土遺物

土は12層に分層できるが、概ね上層は炭化物を含む暗褐色土、下層はホーキブロックなど地山を含む黄褐色土が堆積する。埋土は基本的に周囲から流入した自然堆積と想定されるが、遺物は上層から下層にかけて偏りなく出土することから、貯蔵穴廃絶後において断続的に投棄された可能性が高い。

出土遺物 遺物を第45図に掲げている。130～137は幅の狭い口縁帯に2～3条の凹線を引く甕である。頸部はナデ、体部はハケ調整が施される。138～142はやや拡張した口縁帯に3条の凹線がめぐり、139～142は頸部に刻目突帯が貼り付けられる。このうち139・140は刻みを施した後に突帯上半を強くナデ付けている。143は口縁端部に1条の凹線が引かれた直口壺である。144～148は高坏である。144・145はやや内傾した坏部の口縁直下に3条の沈線を施し、145は外面に赤色塗彩がなされている。147は完全に貫通しない三角形透孔を配し、上下段に多条平行沈線がめぐり高坏脚部である。148は脚裾がほぼ水平に張り出し、裾端部に3条の凹線施文後、円形浮文を貼り付けている。152は甕もしくは壺の体部破片を転用した紡錘車である。ほぼ半分ほどが欠損しているが、直径5.5cm、孔径0.7cmを測る。縁辺は打ち欠き後、粗い研磨整形がなされている。

時期 遺構の時期は、出土遺物がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

SK73(第44図、PL.19)

位置 調査区中央東寄りG16・17グリッド、標高58.75mの尾根部平坦面に立地し、南西側約3mにはSI12が位置している。

調査の経過 Ⅲ層上面において土器溜りを検出し、精査を行ったところ炭化物を多く含む暗褐色土の楕円形のプランを検出した。なお、東壁の一部が木の根による攪乱を受けている。

規模と形態 平面形は長軸1.1m、短軸0.54mの楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは26cmで、壁面は55度の角度で外傾して立ち上がる。Ⅶ層を掘り込んで底面としており、やや湾曲している。

埋土と遺物の出土状況 埋土は2層に分かれ、上層は微細な炭化物やホーキブロックを含有する暗褐色土が堆積し、甕の体部破片などが出土している。下層は地山に類似した褐色土が堆積していることから、壁際からの自然堆積と考えられ埋没過程において土器が廃棄されたものと考えられる。

時期 遺構の時期は、出土遺物がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

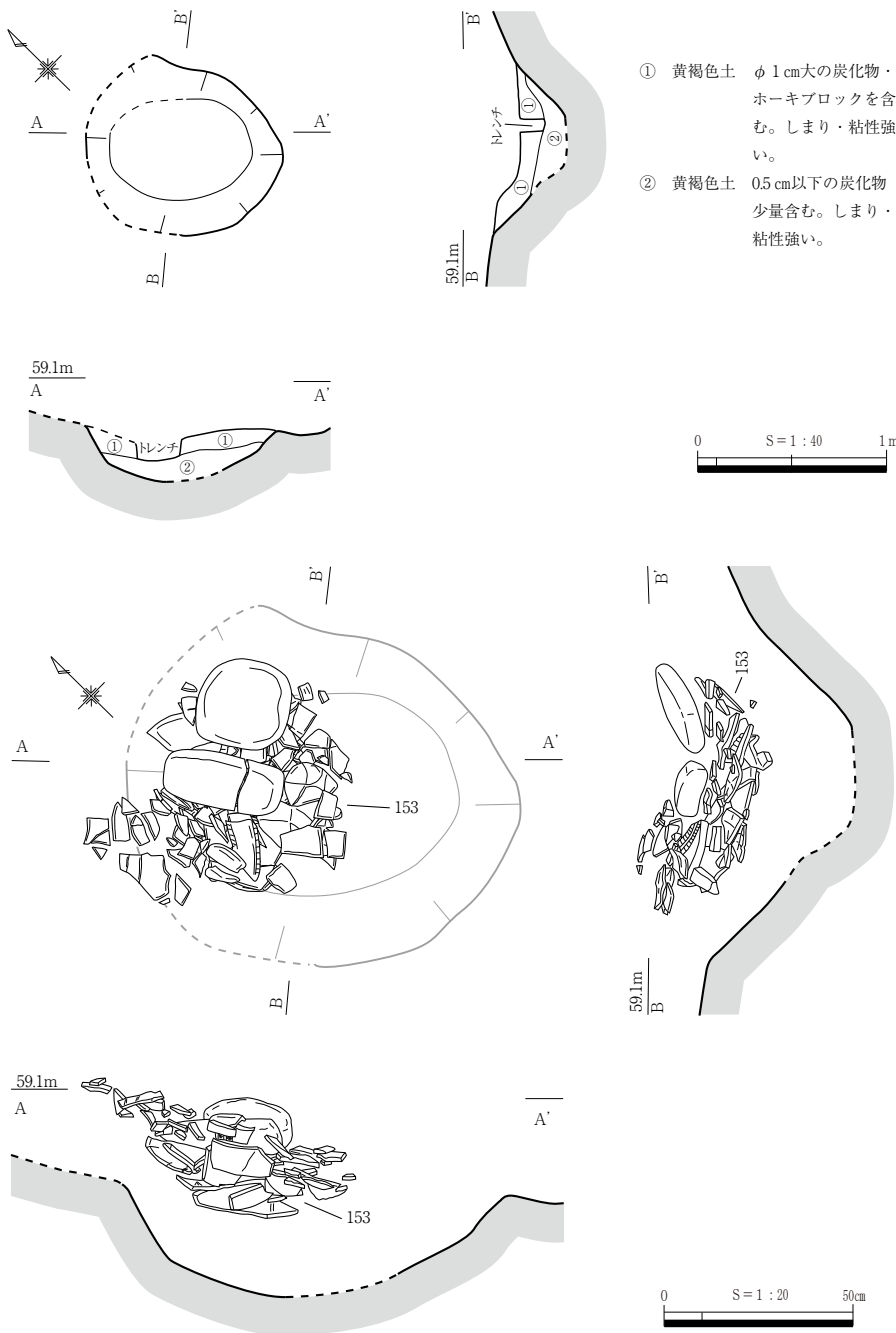
(6)土器棺墓

SX16(第46・47図、表7、巻頭図版2、PL.20・21)

位置 調査区北東G16グリッド、標高58.75～59.0mの尾根部平坦面に立地し、南東側約3mにはSK66が位置している。

調査の経過 Ⅲ層上面において垂円礫を検出し、精査を行ったところ下部から大型の壺153が潰れた状態で出土した。長軸32cm、短軸15cmの方柱状の礫がほぼ水平に、径24cmの円礫が検出面から30度の角度で隣接して配置されている状況が明らかとなり標石と判断した。

規模と形態 壺棺下部の土坑状の掘り込みは、北から北西にかけて木の根の攪乱を受けていたが、現況で長軸1.04m、短軸0.9mの不整形を呈している。検出面から底面までの深さは25cmで、壁面は40



第46図 SX16

出土遺物 土器棺153は口縁部に斜格子文が描かれ、3個1単位の円形浮文が貼り付けられる。頸部はハケ調整後、2条の指頭圧痕貼付突帯がめぐっている。突帯には指によってつまみ上げながら連続的に刺突が施され、下部の突帯は幅広である。肩部から体部はハケ調整後にヘラミガキ、底面は丁寧なナデが行われ、内面は剥落や風化により不明瞭であるがハケ調整後ナデが施されている。

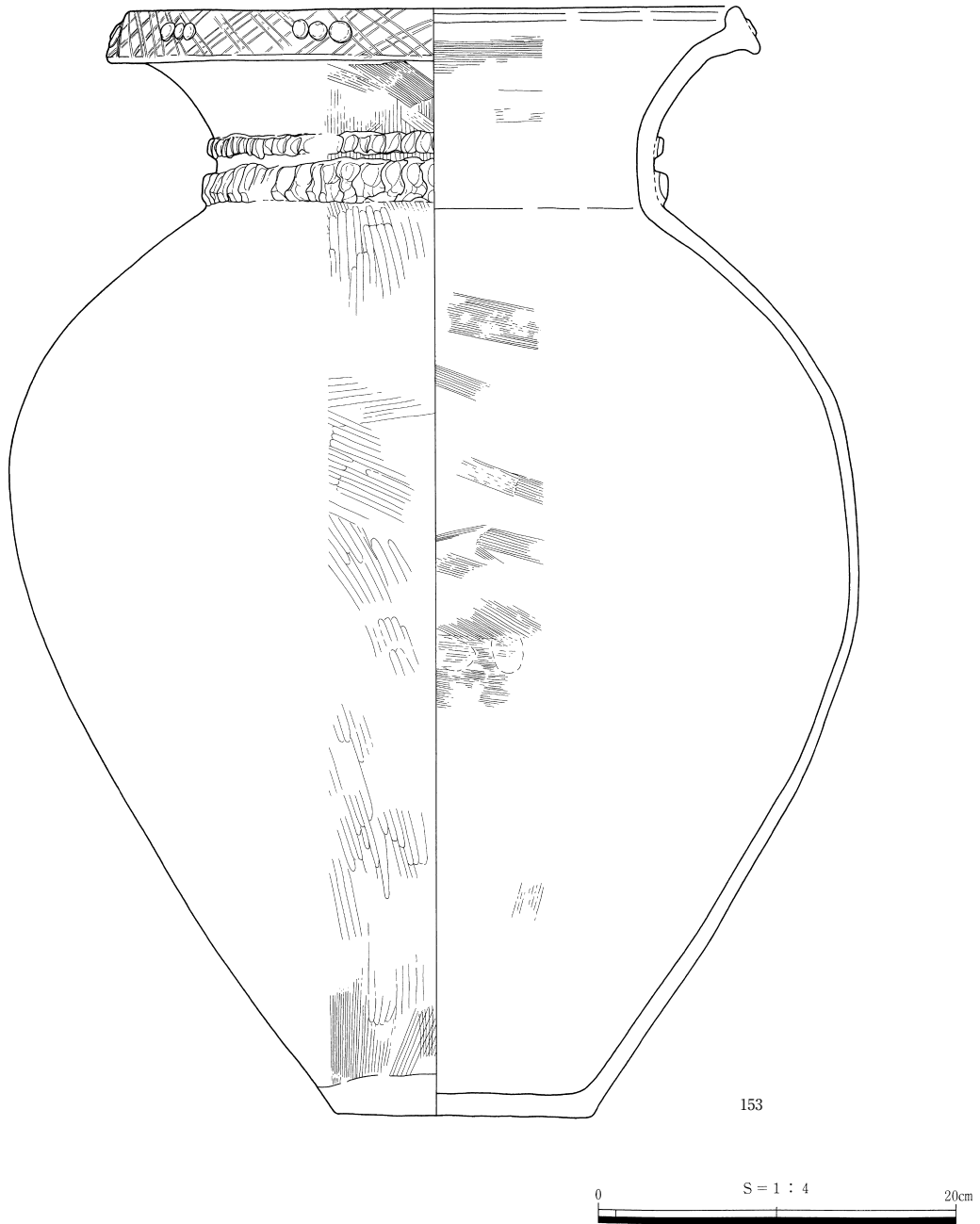
時期 遺構の時期は、出土遺物がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

度の角度で緩やかに立ち上がっている。

壺153は底面から17cm浮いた状況で出土していることから、土器蓋土坑と考える(吉田2000)。土圧によって器体は潰れ、転用土器のためか体部中位が一部欠損している。土器の間隙はほぼ密着しており、土坑埋土から副葬品などは確認できなかった。底面はⅦ層を掘り込んでおり湾曲する。

埋土と遺物の出土状況 埋土は2層に分かれ微細な炭化物を含むが、いずれもしまりが強く地山に近似した黄褐色土であった。

したがって人為的に埋め戻しがなされたものと考えられる。壺153は口縁を南東方向に向け、68×60cmの範囲に厚さ20cmにまとまって出土している。上記のように体部の一部を除きほぼ完存しており、標石も部分的な攪乱を認めつつもほぼ原位置を留めていたと考える。



第47図 SX16出土遺物

(7)ピット

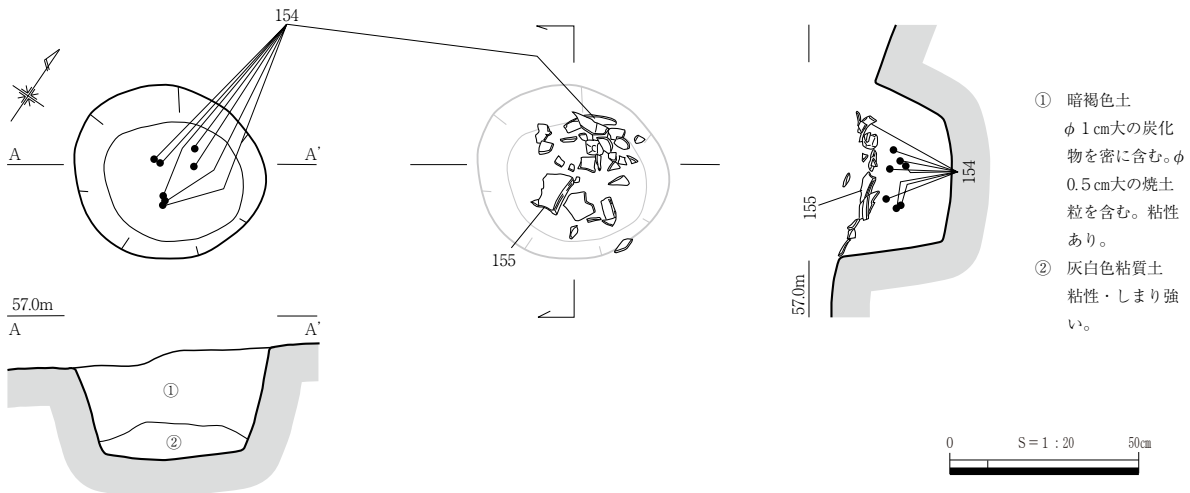
P154(第48・49図、表3・7、PL.22・34)

位置 調査区南西I18グリッド、標高56.75mの谷部斜面上に立地する。北側約7.5m上方にはSS4が位置する。

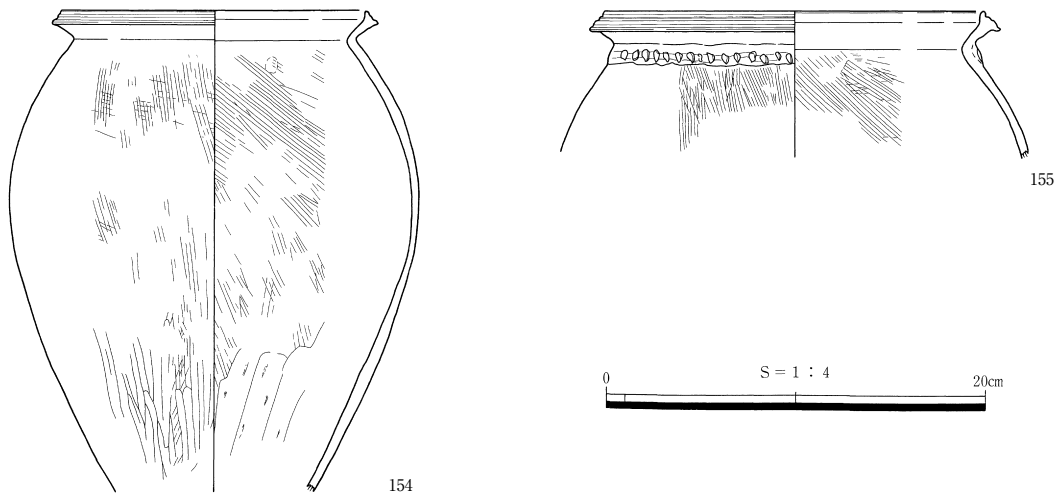
規模と形態 平面形は長軸50cm、短軸46cmの不整円形である。検出面から底面までの深さは28cm、壁面は70度の角度で外傾して立ち上がる。掘り方は桶状を呈し、底面は不整円形で平坦となっている。

埋土と遺物の出土状況 埋土は径1cm大の炭化物を密に含む上層と白色粘質土の下層に分かれる。白色粘質土は意図的に敷かれたものと判断され、甕154・155が1層中に横倒し状態で出土している。また、ピット検出面直上には多数の土器が廃棄されている状況であった。

出土遺物 154は口縁部に3条の凹線をめぐらせる甕で、内面は下半にヘラケズリ、上半をハケによっ



第48図 P154



第49図 P154出土遺物

て仕上げる。155は頸部に刺突を施した貼付突帯がめぐる甕である。突帯上半は刺突後にナデ付けられている。

時期 遺構の時期は、出土土器がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考える。

P172(第51図、表3・11、PL.39)

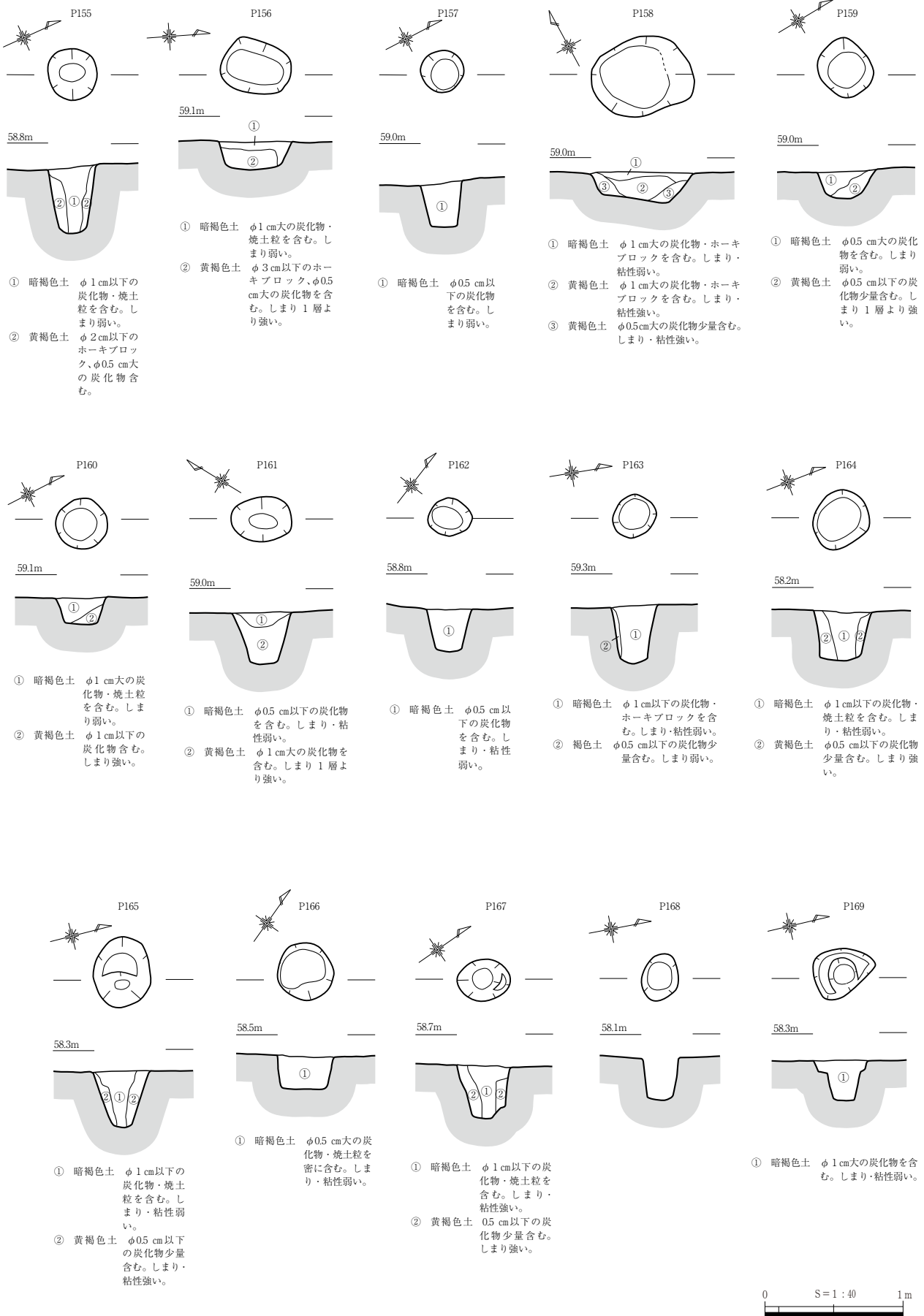
位置 調査区北東G17グリッド、標高58.6mの尾根部平坦面に立地する。北西方向4.5mにはSK66が位置する。

規模と形態 平面形は長軸0.75m、短軸0.6mの楕円形である。検出面から底面までの深さは28cm、壁面は60度の角度で外傾して立ち上がる。掘り方は桶状を呈し、底面は平坦となっている。

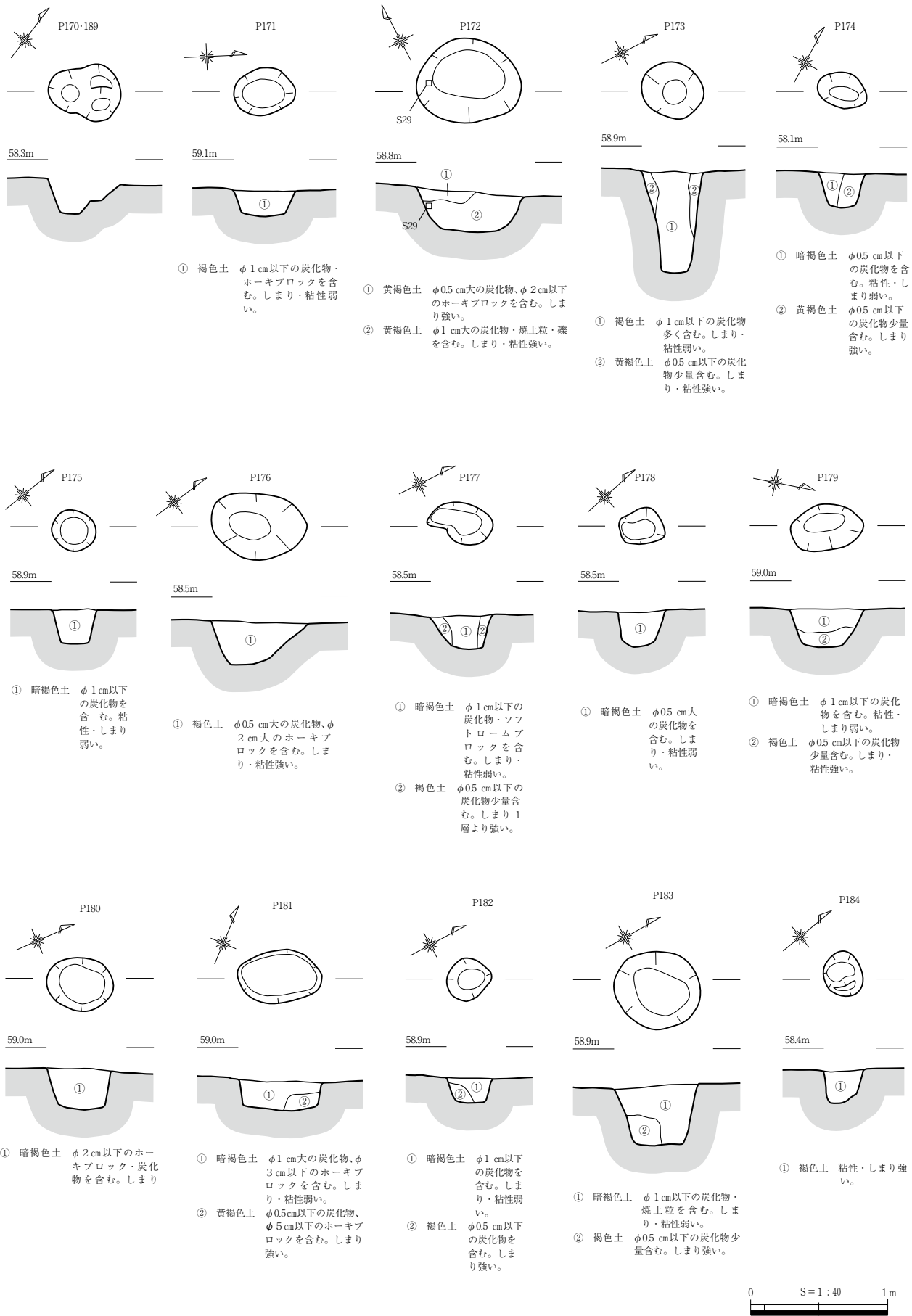
埋土と遺物の出土状況 埋土は炭化物を含む2枚の黄褐色土に分かれ、下層上面から敲石S29が出土している。本遺構は比較的短期間に埋没したものと推測する。

出土遺物 S29は扁平な楕円形礫を用いた敲石であり、下面に敲打痕が認められる。

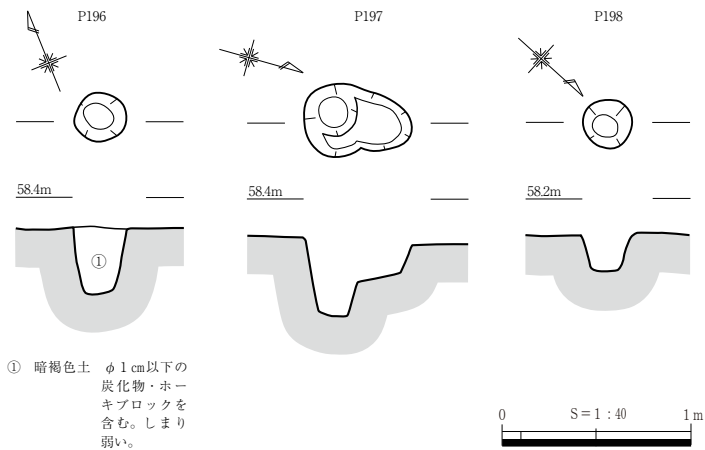
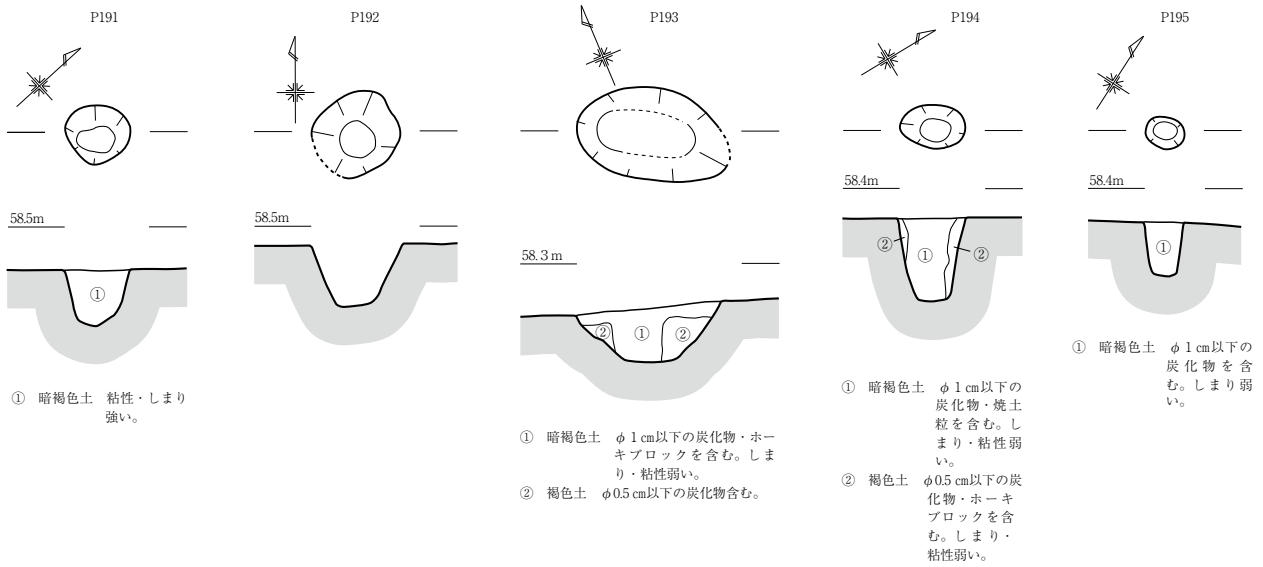
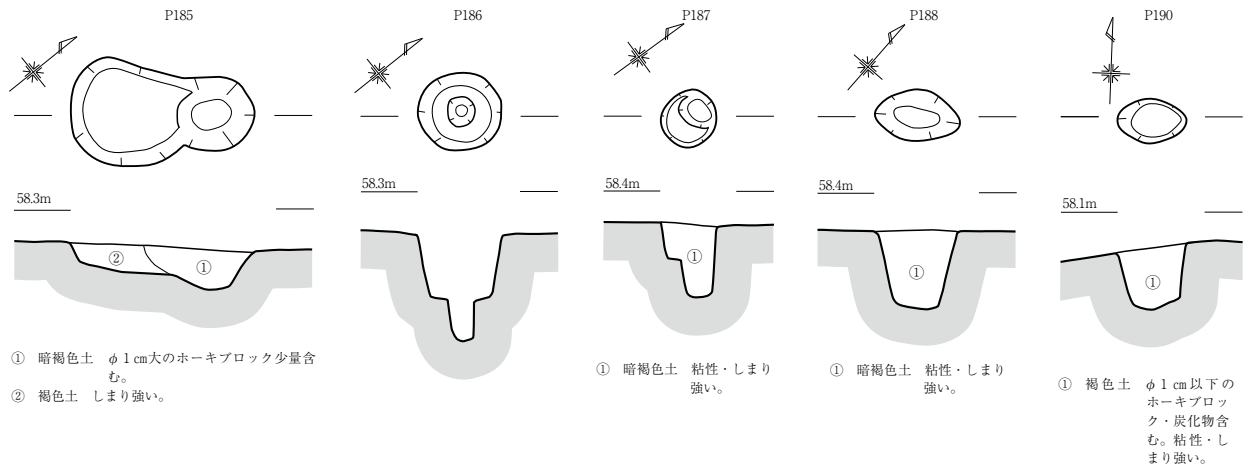
時期 遺構の時期は、埋土の特徴から弥生時代中期後葉と推定される。



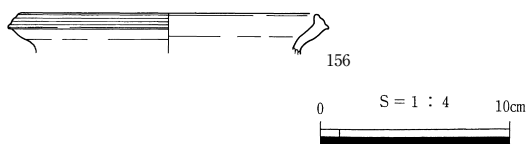
第50図 ピット(1)



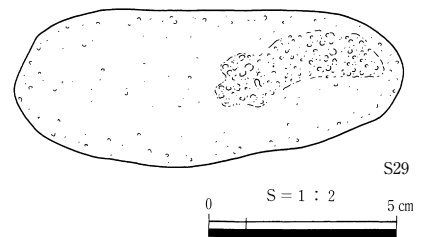
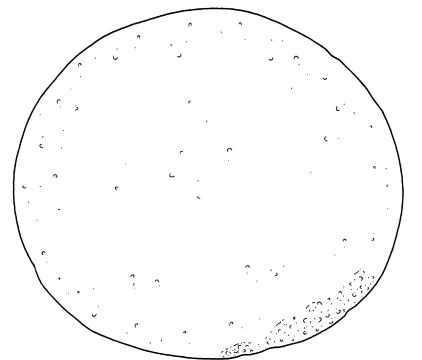
第51図 ピット(2)



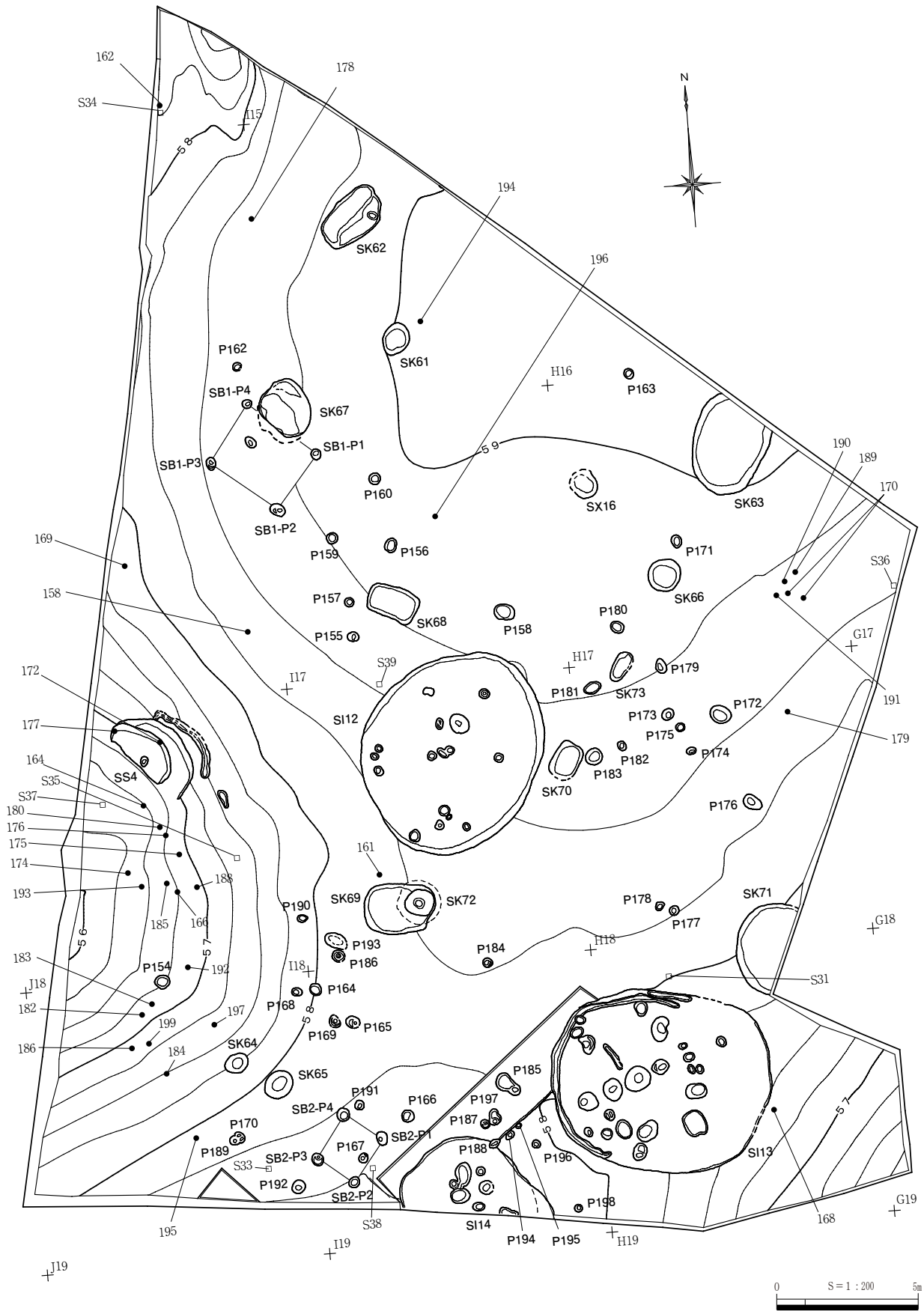
第52図 ピット(3)



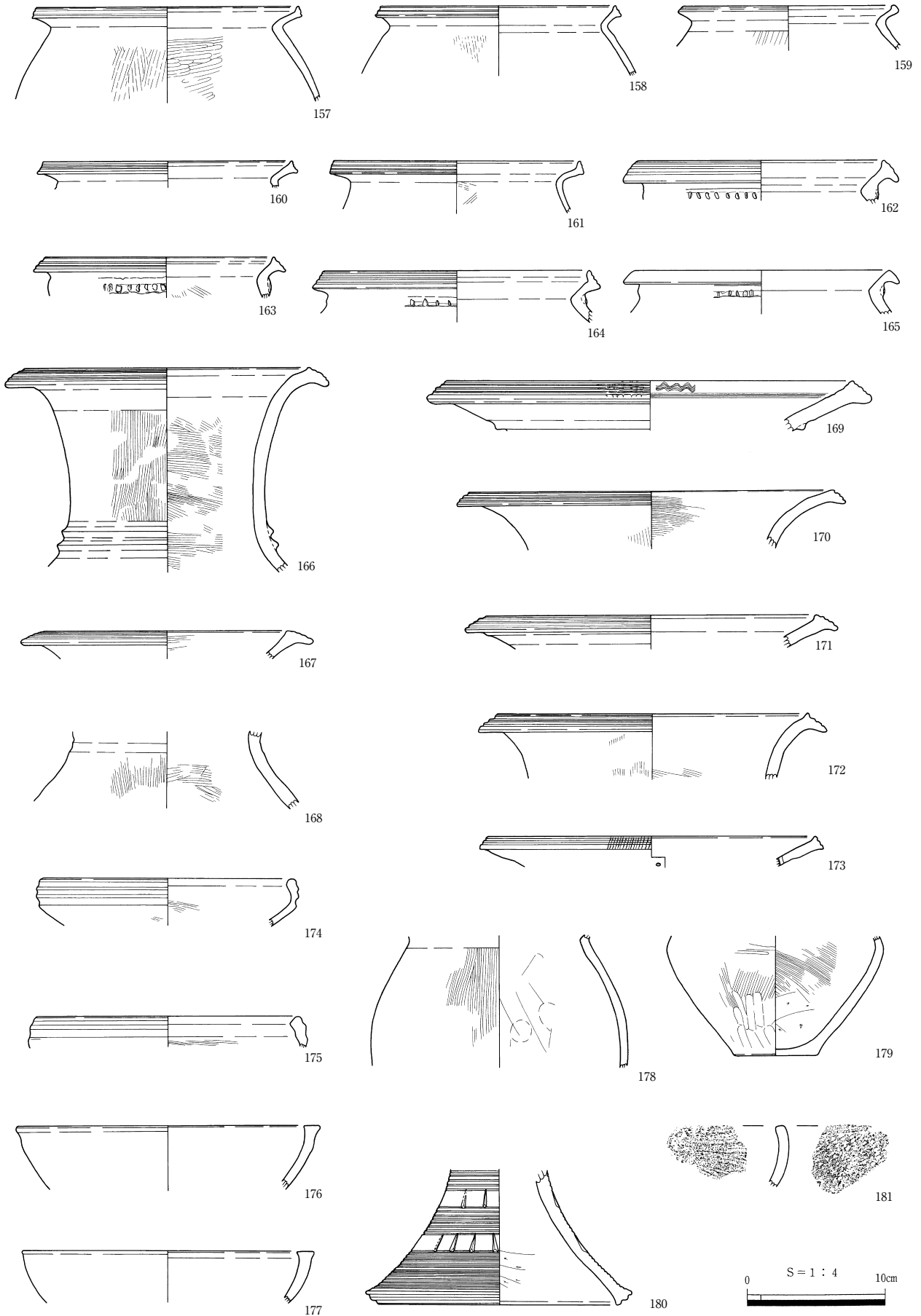
第53図 P186出土遺物



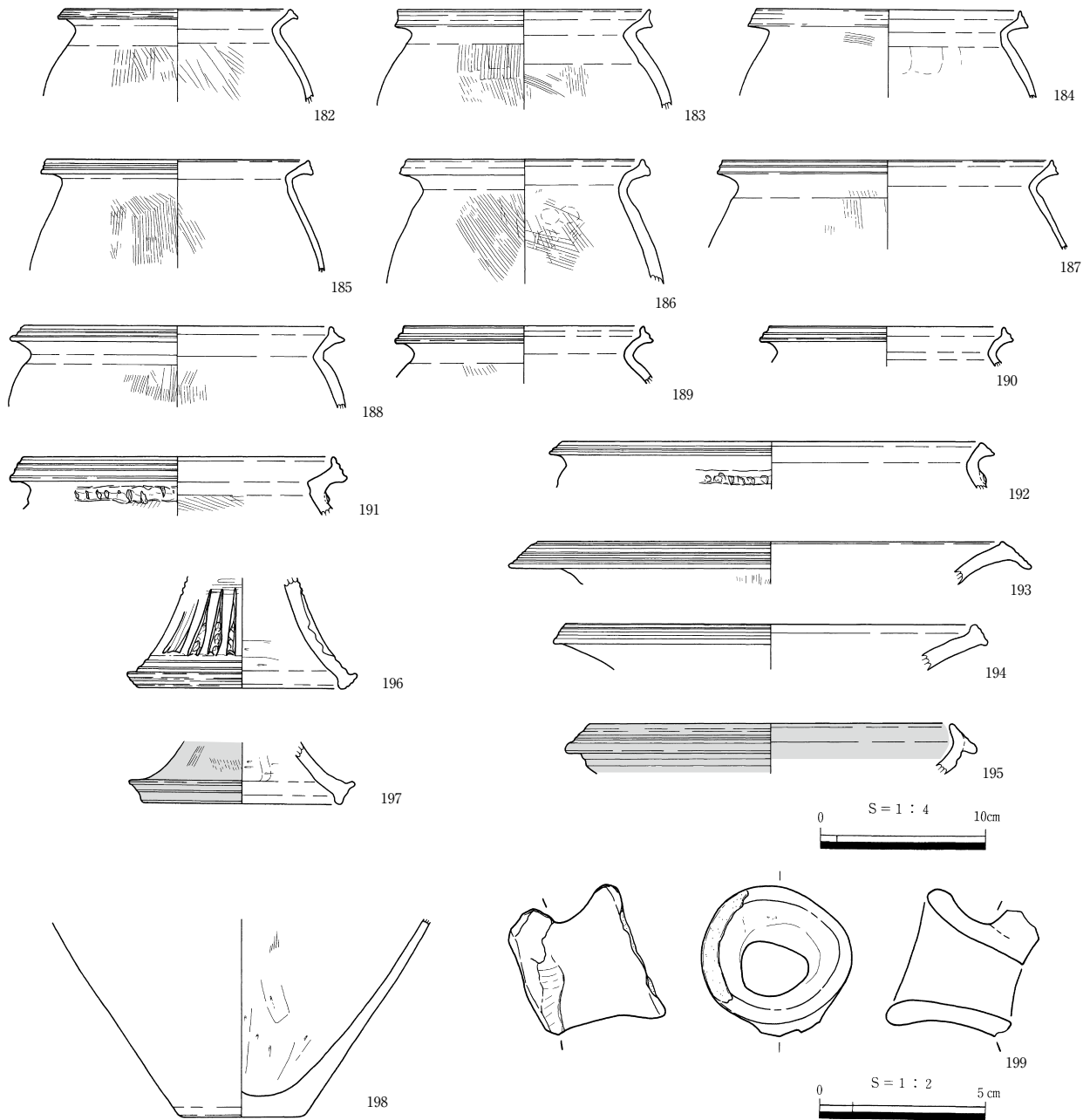
第54図 P172出土遺物



第55図 遺構外遺物分布図



第56図 遺構外出土遺物(1)

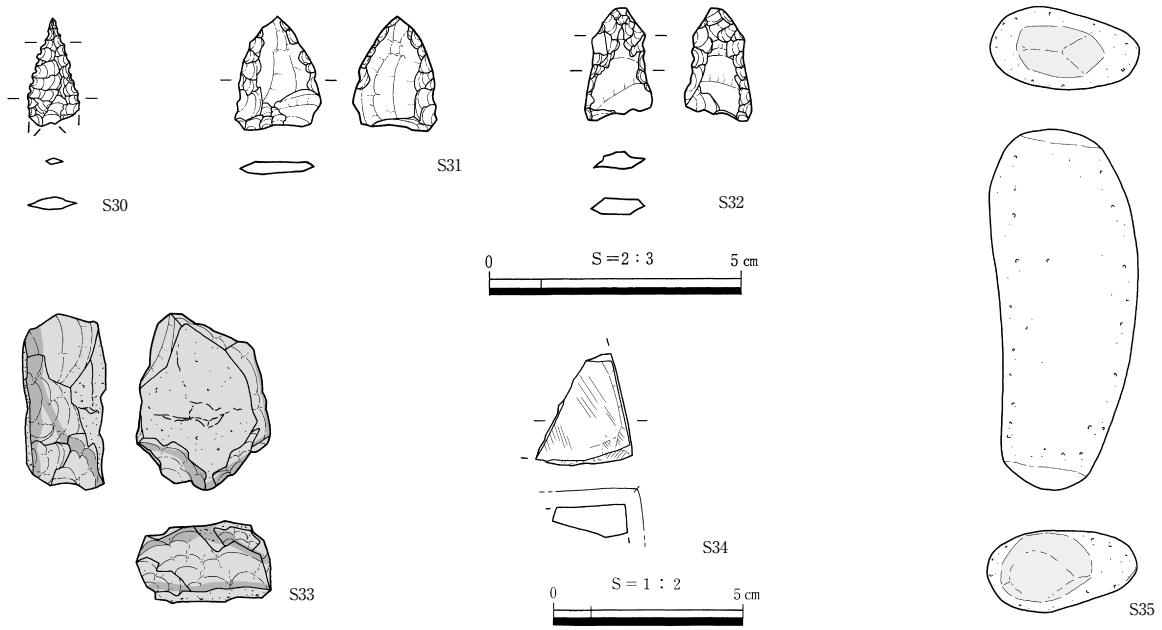


第57図 遺構外出土遺物(2)

(8) 遺構外出土遺物(第56～59図、表7・8、PL.34・36～38・40)

ここでは遺構外出土遺物を掲載する。包含層はⅡ層暗褐色土とⅢ層の褐色土に分かれ、Ⅱ層中のものが多い。遺物の分布は調査区東側が希薄であり、西側谷部に偏る。谷部の土器埋設ピットであるP154周辺に遺物が集中している状況が確認された。

第56図はⅡ層出土土器をまとめている。甕157～161は口縁部に3条の凹線がめぐり、体部にハケ調整を施している。162～165は頸部の貼付突帯上に刺突文を施文した甕である。166～173は壺の口縁～肩部である。166は大きく外反した口縁に3条の凹線を描き、頸部はタテ方向のハケと2条の突帯がめぐり。169は口縁内面に櫛描波状文を施した壺であり、頸部に突帯が横走する。173は口縁端部に2条の凹線を引き、タテ方向に刻みを施している。口縁直下には1ヶ所焼成後の穿孔が見られる。174～177・180は高坏である。174・175は内傾する口縁直下に2～3条の凹線がめぐり高坏坏部であ

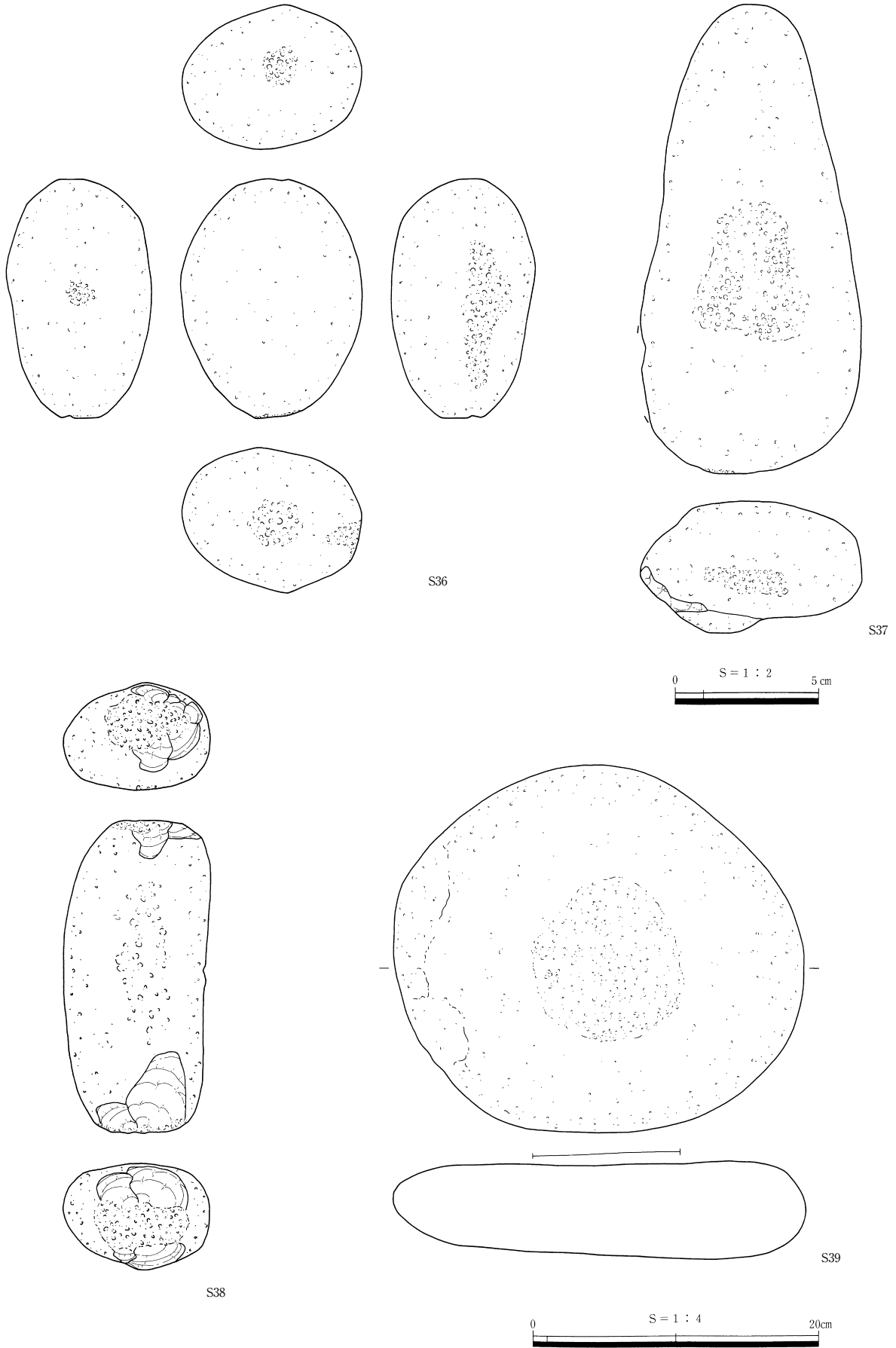


第58図 遺構外出土遺物(3)

る。176・177は緩やかに立ち上がり口縁端部が肥厚する坏部である。180はスカート状に大きく開いた高坏脚部であり、完全に貫通しない三角形透孔を2段配し多条平行沈線をめぐらせている。181は内湾する口縁部にRL縄文が施された縄文土器深鉢破片である。内面はヘラ状工具による粗いナデ調整が認められる。

第57図はⅢ層出土土器を掲げている。182～192は甕であり、いずれも口縁部に2～3条の凹線文を描いている。191・192は頸部に刻目貼付突帯がめぐり、突帯上半をナデ付けている。193・194は壺の口縁部であり、193は大きく外へ張り出した口縁部に3条の凹線が引かれる。195～197は高坏の坏部と脚部である。195は内外面に赤色塗彩が成され、口縁部が斜め下方向に張り出しており、3条の凹線が施文される。196は脚部に三角形の擬似透孔を配しており、内部は刺突が施されている。197は外面に赤色塗彩された高坏脚裾部であり、端部は幅広の凹線が引かれている。199は無頸壺の注口部破片であり、長さ3.5cm、幅4.5cmを測る。内外面ともナデ調整である。

第58・59図に石器を図示している。S30は黒曜石製の凹基式石鏃であり、脚部が欠損している。表裏面とも調整加工は中央部まで及び、鋸歯状に仕上げている。横断面形は概ね凸レンズ状となる。S31は表裏面に大きな素材面を残すサヌカイト製の石鏃である。周縁部からの調整加工は中心部まで及んでおらず、横断面形も板状となっている。S32は表裏面の器体下半に素材面を残すサヌカイト製石鏃である。器体上半は厚みを減じきれていないことから未製品の可能性も残る。S33は厚めの板状素材の縁辺を打ち欠いた赤色顔料素材であり、弥生時代後期の集落である琴浦町笠見第3遺跡で多量に出土している。S34はアプライト製の砥石片であり、縁辺部に研磨による稜線が生じている。S35は小型の棒状礫を用いた磨石であり、上下面に磨面が見られる。S36は楕円形礫の上下、左右の各面に敲打痕が認められる敲石である。S37はバチ形の棒状礫を用いた敲石であり、表面中央と下面に敲打痕が認められる。S38は棒状礫を素材とする敲石で、上下両端に敲打痕と敲打に伴う剥離痕が見られる。S39は大型の扁平礫の表面中央付近に弱い敲打痕がある台石である。



第59図 遺構外出土遺物(4)

表3 ピット計測表

遺構	ピット番号	長軸×短軸-深さ (m)	遺構	ピット番号	長軸×短軸-深さ (m)	遺構	ピット番号	長軸×短軸-深さ (m)	遺構	ピット番号	長軸×短軸-深さ (m)
SI12	1	0.75×0.69-0.24	SI13	10	0.72×0.51-0.69	遺構外	4	0.39×0.39-0.42	遺構外	180	0.32×0.24-0.26
	2	0.30×0.30-0.54		11	0.63×0.54-0.18		1	0.33×0.27-0.15		181	0.52×0.34-0.28
	3	0.33×0.33-0.18		12	0.33×0.21-0.18		155	0.36×0.34-0.48		182	0.48×0.40-0.30
	4	0.39×0.33-0.54		13	0.39×0.33-0.30		157	0.50×0.36-0.20		183	0.62×0.40-0.21
	5	0.42×0.27-0.24		14	0.42×0.36-0.21		158	0.30×0.30-0.32		184	0.34×0.30-0.18
	6	0.36×0.33-0.33		15	0.60×0.45-0.18		159	0.74×0.58-0.22		185	0.62×0.58-0.44
	7	0.27×0.21-0.15		16	0.74×0.60-0.48		160	0.44×0.40-0.20		186	0.34×0.28-0.24
	8	0.30×0.27-0.24		17	0.45×0.30-0.15		161	0.36×0.36-0.18		187	0.96×0.50-0.22
	9	0.27×0.24-0.30		18	0.33×0.27-0.15		162	0.44×0.32-0.36		188	0.42×0.40-0.56
	10	0.30×0.24-0.15		19	0.96×0.84-0.33		163	0.32×0.28-0.30		189	0.30×0.22-0.38
	11	0.36×0.24-0.18		1	0.63×0.51-0.18		164	0.32×0.30-0.42		190	0.44×0.28-0.42
	12	0.45×0.24-0.12		2	0.60×0.51-0.18		166	0.44×0.42-0.32		191	0.54×0.38-0.24
	13	0.27×0.27-0.30		3	0.71×0.57-0.21		167	0.52×0.42-0.40		192	0.36×0.24-0.32
	14	0.39×0.36-0.90		4	0.30×0.27-0.18		168	0.44×0.40-0.24		193	0.32×0.30-0.28
	15	0.45×0.36-0.90		5	0.36×0.30-0.12		169	0.38×0.30-0.36		194	0.48×0.42-0.32
SI13	1	0.94×0.84-0.75	SB1	6	0.39×0.30-0.12	170	0.34×0.26-0.32	195	0.82×0.50-0.30		
	2	0.60×0.48-0.60		7	0.69×0.30-0.15	171	0.46×0.36-0.30	196	0.34×0.24-0.44		
	3	0.78×0.66-0.63		1	0.36×0.36-0.30	173	0.46×0.34-0.20	197	0.22×0.16-0.28		
	4	0.69×0.63-0.81		2	0.57×0.45-0.45	174	0.76×0.62-0.30	198	0.26×0.24-0.32		
	5	0.66×0.54-0.81		3	0.45×0.33-0.48	175	0.44×0.40-0.79	199	0.58×0.38-0.40		
	6	0.51×0.45-0.63		4	0.39×0.33-0.39	176	0.38×0.28-0.28	200	0.26×0.24-0.20		
	7	0.90×0.60-0.66		1	0.51×0.39-0.45	177	0.32×0.28-0.24				
	8	0.36×0.33-0.90		2	0.39×0.39-0.33	178	0.70×0.48-0.32				
	9	0.39×0.27-0.18		3	0.39×0.36-0.51	179	0.28×0.30-0.26				

表4 梅田萱峯遺跡2区出土土器観察表(1)

遺物No	挿入PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
1	第10回 PL.24	SI12 1層	弥生土器 甕	※15.6 △22.8	口縁-頸部 1/8	外面：口縁-頸部調整不明、体部上半ハケ・下半ミガキ 内面：口縁-頸部ハケ→ナデ、体部上半ハケ・下半ケズリ	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	内外面スス付着	1170
2	第10回 PL.23	SI12 埋土	弥生土器 甕	※16.2 △4.0	口縁-体部 1/8	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部風化のため調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1673
3	第10回 PL.23	SI12-P1 埋土	弥生土器 甕	※14.4 △1.3	口縁部 1/8	外面：口縁部2条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：暗褐色 内面：暗褐色	良好		1742
4	第10回 PL.23	SI12 1層	弥生土器 甕	※15.0 △2.6	口縁-体部 1/3	外面：口縁部3条凹線文、頸部刻目貼付突帯・ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1644
5	第10回 PL.23	SI12 1層	弥生土器 高坏	※18.4(底) △2.5	脚-裾部 1/7	外面：脚部ナデ、裾部1条凹線文 内面：脚-裾部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄-黄灰色 内面：灰黄色	良好		1662
7	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	※15.6 △10.5	口縁-体部 1/8	外面：口縁部1条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部上半ミガキ・下半調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1349
8	第13回 PL.24	SI13-P1 埋土	弥生土器 甕	※16.2 △8.9	口縁-体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部刻目貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部指オサエ・ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：黄橙-浅黄褐色	良好		2128
9	第13回 PL.24	SI13-P1 埋土	弥生土器 甕	※17.2 △4.4	口縁-体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部指オサエ・ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部風化のため調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい橙-褐色 内面：にぶい橙-褐色	良好	外面スス付着	2207
10	第13回 PL.24	SI13-P1 埋土	弥生土器 甕	※16.0 △5.2	口縁-体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部貼付突帯・ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部指オサエ・ハケ→ミガキ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄橙-褐色 内面：黄褐色	良好		2093
11	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	※15.6 △7.5	口縁-体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1320
12	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	※15.0 △5.0	口縁-体部 1/7	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部指オサエ→ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	外面スス付着	1416
13	第13回 PL.24	SI13-P4 埋土	弥生土器 甕	※18.2 △4.9	口縁-体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-体部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		2116
14	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	— △6.0	頸-体部 1/8	外面：頸-体部風化のため調整不明 内面：頸部ナデ、体部ハケ→指オサエ・ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：橙色	不良		1279
15	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	※15.8 △4.1	口縁-体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：黄灰-浅黄褐色	良好	外面スス付着	1334
16	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	※13.0 △3.8	口縁-体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部指オサエ・ナデ、体部ハケ 内面：口縁-体部風化のため調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1334
17	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	※19.6 △1.8	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部1条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1191
18	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	※14.4 △5.5	口縁-体部 1/4	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：淡黄-黄灰色 内面：浅黄褐色	良好		1387
19	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	※13.0 △4.1	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ・ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1316
20	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 甕	— △4.4	頸部 1/8	外面：頸部ナデ 内面：頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1256・1259
21	第13回 PL.35	SI13 2層	弥生土器 高坏	※21.6 △5.2	口縁-体部 1/2	外面：口縁部2条凹線文、体部指ナデ→ミガキ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙-褐色 内面：橙色	良好	1437・1438・1439・1440・1441・2182	
22	第13回 PL.24	SI13-P1 埋土	弥生土器 高坏	※19.8 △4.7	口縁-体部 1/8	外面：口縁-体部風化のため調整不明 内面：口縁-体部風化のため調整不明	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		2117
23	第13回 PL.24	SI13 2層	弥生土器 高坏	※13.0(底) △6.0	脚-裾部 1/8	外面：脚部5条凹線文・三角形透孔・10条凹線文、裾部1条凹線文 内面：脚-裾部ナデ	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面：淡黄色 内面：橙色	良好		1405・1406

表5 梅田菅峯遺跡2区出土土器観察表(2)

遺物No.	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
24	第13図 PL.24	SI13 2層	弥生土器 高坏	※170(底) △3.8	脚~裾部 1/8	外面:脚部7条凹線文、裾部1条凹線文 内面:脚部ケズリ→ナデ、裾部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好		1317
25	第16図 PL.23	SI14 3層	弥生土器 甕	※17.4 △4.3	口縁~体部 1/8	外面:口縁部3条凹線文、頸部刻目貼付突帯、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径3mm以下の白色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好		3196
26	第16図 PL.23	SI14 1層	弥生土器 甕・壺?	※6.6(底) △6.4	底部 1/2	外面:底部ミガキ、底面ナデ 内面:底部ケズリ、底面ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:浅黄褐色~にぶい褐色 内面:橙~灰褐色	良好	外面スス附着	2225
27	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※14.8 △10.0	口縁~体部 1/4	外面:口縁部調整不明、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		872
28	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※12.9 △4.4	口縁~体部 1/8	外面:口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部調整不明 内面:口縁~頸部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の灰・黒色砂粒	外面:褐色 内面:褐色	良好		814
29	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※19.2 △3.7	口縁~体部 1/8	外面:口縁部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		1047・1678
30	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※15.2 △2.8	口縁~体部 1/8	外面:口縁~体部風化により調整不明 内面:口縁~体部ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒・ 雲母片	外面:褐色 内面:褐色	良好		810
31	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※16.4 △2.6	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面:口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好	外面スス附着	902
32	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※16.0 △3.6	口縁~体部 1/6	外面:口縁部3条凹線文、頸~体部風化により調整不明 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径0.5mm以下の黒色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好		930
33	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※18.0 △3.7	口縁~体部 1/8	外面:口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部調整不明 内面:口縁~頸部ナデ、体部調整不明	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面:褐色 内面:褐色	良好		871
34	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※14.8 △2.8	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部3条凹線文、頸部ナデ 内面:口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		834
35	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※17.8 △6.7	口縁~体部 1/4	外面:口縁部3条凹線文、頸部指頭圧痕貼付突帯・ナデ、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ→ナデ	径2mm以下の褐・黒色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好		835
36	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 甕	※21.6 △5.0	口縁~体部 1/8	外面:口縁部2条凹線文、頸部指頭圧痕貼付突帯・ナデ、体部調整不明 内面:口縁~頸部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		1040
37	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 壺	※25.0 △2.9	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部3条凹線文、頸部1条突帯・ナデ 内面:口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		1675
38	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 壺	※17.9 △2.3	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部4条凹線文、頸部ナデ 内面:口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒・雲 母片	外面:黄褐色 内面:浅黄褐色	良好		951
39	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 高坏	※20.5 △3.5	口縁~体部 1/6	外面:口縁部2条凹線文、口縁部2条凹線文、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰~灰白色 内面:灰~灰白色	良好		964・1575
40	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 高坏	※19.8 △3.7	口縁~体部 1/8	外面:口縁部ナデ、体部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ハケ→ナデ	径0.5mm以下の黒色砂粒・ 雲母片	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好	内外面赤色塗彩	984
41	第18図 PL.25	SS4 1層	弥生土器 高坏	※22.0 △2.6	口縁~体部 1/8	外面:口縁部2条凹線文、体部ナデ 内面:口縁~体部ナデ	径0.5mm以下の黒色砂粒・ 雲母片	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好	内外面赤色塗彩	2393
42	第18図 PL.25	SS4 2層	弥生土器 甕・壺	※51(底) △7.0	底部 1/1	外面:底部ミガキ、底面ナデ 内面:底部ハケ	径1mm以下の白色砂粒・雲 母片	外面:浅黄褐色~褐灰色 内面:浅黄褐色	良好		2397
43	第23図 PL.26	SK62 1層	弥生土器 甕	※18.0 △15.2	口縁~体部 1/4	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面:明黄褐色 内面:黄褐色	良好		1973・1980・ 2008
44	第23図 PL.26	SK62 1層	弥生土器 甕	※16.0 △22.1	口縁~体部 1/6	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ・櫛波状文 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面:褐色 内面:黄褐色	良好	外面スス附着	1841・1863・1869・1882・1887・ 1900・1909・1910・1975・1984
45	第23図 PL.26	SK62 1層	弥生土器 甕	※16.2 △7.6	口縁~体部 1/4	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部波状文・ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面:褐色 内面:黄褐色	良好		362
46	第23図 PL.26	SK62 1層	弥生土器 甕	※20.3 △2.3	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面:口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好		1870
47	第23図 PL.26	SK62 1層	弥生土器 甕	※15.1 △5.0	口縁~体部 1/5	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の黒色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好		1895・2000
48	第23図 PL.26	SK62 1層	弥生土器 甕	※15.9 △2.4	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面:口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:明黄褐色	良好		334
49	第23図 PL.26	SK62 1層	弥生土器 壺	※21.3 △5.9	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部3条凹線文、頸部上半ナデ・下半ハケ 内面:口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:明黄褐色 内面:明黄褐色	良好		340
50	第23図 PL.26	SK62 1層	弥生土器 高坏	※124(底) △3.0	脚部 1/8	外面:脚部4条凹線文、三角形透孔、裾部1条凹線文 内面:脚部調整不明、裾部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰黄褐色 内面:灰黄褐色	良好		1828
51	第23図 PL.26	SK62 1層	弥生土器 高坏	※102(底) △2.7	脚部 1/6	外面:脚部ナデ、裾部1条凹線文 内面:脚部ケズリ、裾部ナデ	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面:暗灰黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		1825・1829
54	第25図 PL.27	SK63 1層	弥生土器 甕	※14.1 △3.3	口縁~体部 1/6	外面:口縁部凹線文、頸部ナデ、体部ハケ→ナデ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒・雲 母片	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		3097
55	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 甕	※18.2 △3.0	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部風化のため調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		2948
56	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 甕	※19.4 △3.3	口縁~体部 1/8	外面:口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色~褐灰色 内面:黄褐色	良好		2982
57	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 甕	※10.7 △4.2	口縁~体部 1/6	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ナデ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:赤褐色 内面:赤褐~褐色	良好	内外面赤色塗彩	2984
58	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 甕	※18.0 △3.2	口縁~体部 1/6	外面:口縁部風化のため調整不明、頸部ナデ、体部調整不明 内面:口縁~頸部ナデ、体部風化のため調整不明	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面:褐色 内面:橙~黒褐色	良好		3031
59	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 甕	※16.0 △3.2	口縁~体部 1/8	外面:口縁部風化のため調整不明、頸部ナデ、体部調整不明 内面:口縁~体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色~黒褐色 内面:黄褐色	良好		3024
60	第25図 PL.27	SK63 1層	弥生土器 甕	※17.0 △5.0	口縁~体部 1/8	外面:口縁部4条凹線文、頸部ナデ、体部風化のため調整不明 内面:口縁~頸部ナデ、体部指オサエ・ハケ	径1mm以下の白・赤色砂粒	外面:黄褐色 内面:明黄褐色	良好		2835
61	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 壺	※23.0 △6.0	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部4条凹線文、頸部ハケ・ナデ 内面:口縁部ナデ、頸部ハケ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒・雲 母片	外面:黄褐~浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好		3039
62	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 壺	※21.2 △5.9	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部2条凹線文、頸部ナデ・ハケ 内面:口縁~頸部ハケ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		2989
63	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 無頸壺	※14.6 △8.1	口縁~体部 1/6	外面:口縁部1条凹線文、口縁部6条凹線文、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、体部ハケ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒・雲 母片	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		3012・3100
64	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 高坏	※140(底) △2.9	脚部	外面:脚部3条凹線文・刺突文、裾部ナデ 内面:脚部裾部ナデ、脚部ケズリ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:赤褐色 内面:赤褐~黄褐~黒褐色	良好	内外面赤色塗彩	3172
65	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 高坏	※140(底) △3.8	脚部	外面:脚部3条凹線文・刺突文、裾部ナデ 内面:脚部裾部ナデ、脚部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:赤褐~黄褐色 内面:黄褐~黒褐色	良好	内外面赤色塗彩	3016
66	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 甕・壺?	50(底) △3.3	底部 1/1	外面:底部ハケ→ナデ、底面ナデ 内面:底部ナデ・指オサエ	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		3093
67	第25図 PL.27	SK63 2層	弥生土器 甕・壺?	※60(底) △4.5	底部 1/2	外面:底部ミガキ・ナデ、底面ミガキ 内面:底部ハケ、底面ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:赤褐~黄褐色 内面:黄褐色	良好		3101
68	第27図 PL.31	SK64 1層	弥生土器 甕	※15.4 △6.0	口縁~体部 1/4	外面:口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ→ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		751
69	第27図 PL.31	SK64 1層	弥生土器 甕	※17.8 △6.0	口縁~体部 1/6	外面:口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:灰褐色	良好		747
70	第27図 PL.31	SK64 1層	弥生土器 甕	※12.2 △4.1	口縁~体部 1/8	外面:口縁部1条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径2mm以下の白色砂粒	外面:にぶい橙~黄褐色 内面:にぶい橙~黄褐色	良好		756
71	第27図 PL.31	SK64 1層	弥生土器 甕	※16.0 △3.9	口縁~体部 1/8	外面:口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁~頸部ナデ、体部ハケ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:褐灰色 内面:褐灰色	良好		728・733
72	第27図 PL.31	SK64 1層	弥生土器 甕	※15.8 △3.0	口縁~体部 1/4	外面:口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁~体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		727
73	第27図 PL.31	SK64 1層	弥生土器 甕	※16.8 △2.8	口縁~頸部 1/8	外面:口縁部3条凹線文、頸部指頭圧痕貼付突帯・ナデ 内面:口縁部~頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒・雲 母片	外面:灰褐色 内面:暗灰黄色	良好		738

表6 梅田萱峯遺跡2区出土土器観察表(3)

遺物No	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm)器高(cm)	部位残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
74	第27図 PL.31	SK64 1層	弥生土器 甕	※18.2 △2.7	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部指頭庄痕貼付突帯・ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		734
75	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 甕	※14.8 △14.5	口縁-体部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	外面スス付着	717・718・719・1156・1162・1534
76	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 甕	※14.5 △5.8	口縁-体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：橙色 内面：橙色	良好		1141・1142
77	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 甕	※13.8 △6.1	口縁-体部 1/2	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ・指オサエ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：にふい黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		1153・1534
78	第29図 PL.28	SK65 1・2層	弥生土器 甕	※15.8 △6.9	口縁-体部 1/2	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ・指オサエ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：黒褐色 内面：浅黄褐色-灰黄褐色	良好		1169・2158・2162・2163
79	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 甕	※14.6 △4.3	口縁-体部 1/4	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ・ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1482・1483・1531
80	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 甕	※17.2 △8.5	口縁-体部 1/2	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ・指オサエ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にふい黄褐色-灰黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		705・1148・1160・1161・1481・1534
81	第29図 PL.28	SK65 2層	弥生土器 甕	※15.6 △5.3	口縁-体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1469
82	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 甕	※17.0 △3.6	口縁-体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部指オサエ・ナデ、体部ハケ 内面：口縁-体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：灰黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		694・1150
83	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 甕	※14.2 △6.4	口縁-体部 1/2	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：にふい黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		689・1146・1534
84	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 甕	※15.2 △1.9	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		1528
85	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 甕	※17.8 △3.0	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部指頭庄痕貼付突帯・ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1526
86	第29図 PL.29	SK65 2層	弥生土器 甕	— △18.0	体部 1/3	外面：体部ハケ 内面：体部ハケ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面スス付着	2155・2167
87	第29図 PL.28	SK65 1層	弥生土器 高杯	※11.0 △3.3	口縁-体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、口縁部2条凹線文、体部ハケ→ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：浅黄-黄灰色 内面：浅黄-黄灰色	良好		685
88	第29図 PL.29	SK65 1層	弥生土器 高杯	※13.6(底) △13.0	脚部 1/3	外面：脚部三角形透孔、凹線文、裾部2条凹線文 内面：脚部ケズリ・絞り痕、裾部ケズリ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	外面赤色塗彩	1143・1163・1164
89	第29図 PL.29	SK65 1層	弥生土器 壺・甕?	※8.1(底) △5.0	底部 1/2	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：にふい黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		678
90	第29図 PL.29	SK65 1層	弥生土器 壺・甕?	※6.0(底) △3.8	底部 1/1	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面スス付着	1147
91	第32図 PL.30	SK66 1層	弥生土器 甕	※16.2 △4.9	口縁-体部 1/8	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の黒色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		444
92	第32図 PL.30	SK66 1層	弥生土器 甕	※18.4 △3.0	口縁-体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部風化のため調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		441
93	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 甕	※15.6 △6.6	口縁-体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1703
94	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 甕	※21.2 △5.5	口縁-体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径0.2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2421
95	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 甕	※17.8 △2.5	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部指オサエ・ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にふい黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		2445
96	第32図 PL.30	SK66 1層	弥生土器 甕	※19.8 △3.7	口縁-体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文・円形浮文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部風化のため調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		426
97	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 甕	※21.4 △2.5	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯・ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径0.2mm以下の白・黒色砂粒	外面：にふい黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		2428
98	第32図 PL.30	SK66 1層	弥生土器 甕	※16.7 △2.6	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯・ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：明黄褐色	良好		408
99	第32図 PL.30	SK66 1層	弥生土器 甕	※18.0 △2.9	口縁-頸部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯・ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		260
100	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 甕	※20.6 △3.1	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯、 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：にふい黄褐色	良好		2470
101	第32図 PL.30	SK66 1層	弥生土器 壺	※21.6 △8.4	口縁-体部 1/4	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ・ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		238
102	第32図 PL.30	SK66 1層	弥生土器 壺	※25.6 △3.5	口縁-頸部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ・ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		231
103	第32図 PL.31	SK66 1層	弥生土器 壺	— △11.1	頸-体部 1/4	外面：頸部4条凹線文、体部ハケ 内面：頸部ナデ、体部ハケ	径0.5mm以下の白・黒色砂粒	外面：にふい黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		172・230・2289・2292・2300・2431
104	第32図 PL.30	SK66 1層	弥生土器 壺	※24.0 △2.1	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部5条凹線文、頸部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：黄褐色	良好		242
105	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 高杯	※21.4 △3.4	口縁-体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にふい黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		2463
106	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 高杯	※17.4 △2.6	口縁-体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、体部ハケ→ナデ 内面：口縁-体部ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：にふい黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		2460
107	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 高杯	※20.2 △3.6	口縁-体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1.5mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：黄褐色	良好		2415・2416
108	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 高杯	※18.0 △3.8	口縁-体部 1/8	外面：口縁部ナデ、体部ハケ→ミガキ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色-褐灰色 内面：橙色	良好		2465
109	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 高杯	※18.8 △4.4	口縁-体部 1/8	外面：口縁部1条凹線文、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部風化のため調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：黄褐色	良好		1708
110	第32図 PL.30	SK66 2層	弥生土器 高杯	※10.2(底) △5.4	脚部 1/4	外面：脚部三角形透孔・13条凹線文、裾部2条凹線文 内面：脚部風化のため調整不明	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		2468
111	第34図 PL.32	SK67 1層	弥生土器 甕	※17.6 △2.0	口縁-頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部指頭庄痕貼付突帯・ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		2764
112	第36図 PL.32	SK68 1層	弥生土器 甕	※19.4 △4.5	口縁-体部 1/8	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にふい黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		2490
113	第38図 PL.32	SK69 1層	弥生土器 甕	※14.0 △2.9	口縁-体部 1/2	外面：口縁部摩滅調整不明、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-体部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2620
114	第38図 PL.32	SK69 1層	弥生土器 甕	※16.1 △4.5	口縁-体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ→ナデ 内面：口縁-頸部ナデ、体部指オサエ・ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：明黄褐色	良好		101
115	第40図 PL.32	SK70 2層	弥生土器 甕	※19.5 △12.5	口縁-体部 1/2	外面：口縁部3条凹線文、頸部指頭庄痕貼付突帯・ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		251・942・943・949・950・951・952・953・954・955・956・957・958・959・960・961・962・963・964・965・966・967・968・969・970・971・972・973・974・975・976・977・978・979・980・981・982・983・984・985・986・987・988・989・990・991・992・993・994・995・996・997・998・999・1000
116	第40図 PL.32	SK70 1層	弥生土器 甕	※12.5 △5.3	口縁-体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部指頭庄痕貼付突帯・ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		497
117	第40図 PL.32	SK70 1層	弥生土器 甕	※18.5 △2.5	口縁-頸部 1/4	外面：口縁部凹線文、頸部指頭庄痕貼付突帯・ナデ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の黒色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		468
118	第40図 PL.32	SK70 1層	弥生土器 甕	※16.2 △6.6	口縁-体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	外面焦げ付着	2071
119	第40図 PL.32	SK70 2層	弥生土器 甕	※15.8 △5.5	口縁-体部 1/4	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		3126
120	第40図 PL.32	SK70 2層	弥生土器 甕	※8.1(底) △20.2	体部-底部 1/6	外面：体部中位ハケ、体部下半ミガキ、底面ナデ 内面：体部中位ハケ、体部下半ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色-褐灰色 内面：にふい黄褐色-明黄褐色	良好		2671・2673・3131・3135・3141
121	第40図 PL.32	SK70 2層	弥生土器 甕	※15.0 △2.8	口縁-頸部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径2mm以下の灰色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		3121

表8 梅田萱峯遺跡2区出土土器観察表(5)

遺物No	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
171	第56図 PL.36	I14グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※23.8 △2.4	口縁部 1/6	外面：口縁部4条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄色 内面：にぶい黄褐色	良好		1772
172	第56図 PL.36	I15グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※22.2 △4.7	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ・ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ・ナデ	径0.2mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		21
173	第56図 PL.37	I17グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※23.6 △2.2	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部風化により調整不明 内面：口縁～頸部風化により調整不明	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		14
174	第56図 PL.36	I17グリッド Ⅲ層	弥生土器 高坏	※18.0 △3.4	口縁～体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		127
175	第56図 PL.36	I17グリッド Ⅲ層	弥生土器 高坏	※18.8 △2.2	口縁～体部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		185・201
176	第56図 PL.36	I17グリッド Ⅲ層	弥生土器 高坏	※19.8 △4.6	脚～裾部 1/8	外面：口縁～体部風化により調整不明 内面：口縁～体部風化により調整不明	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：黄褐色	良好		41
177	第56図 PL.36	I17グリッド Ⅲ層	弥生土器 高坏	※18.8 △3.8	口縁～体部 1/8	外面：口縁～体部風化により調整不明 内面：口縁～体部風化により調整不明	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		64
178	第56図 PL.36	I15グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	— △9.5	— 1/5	外面：体部ハケ→ナデ 内面：体部ケズリ・ナデ・指オサエ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面焦げ付着	1772・1779
179	第56図 PL.37	G17グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※5.7(底) △8.6	体～底部 1/8	外面：体～底部ハケ→ミガキ、底面ナデ 内面：体部ハケ、底部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好		2784
180	第56図 PL.36	I17グリッド Ⅲ層	弥生土器 高坏	※9.6(径) △17.2	脚～裾部 1/8	外面：脚部5条凹線・三角透孔・8条凹線・三角透孔・13条凹線 内面：脚部ケズリ、裾部ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		40
181	第56図 PL.37	— Ⅲ層	縄文土器 深鉢	— △4.4	— 1/8	外面：口縁部 内面：口縁部ナデ	径3mm以下の灰色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		202
182	第57図 PL.36	I18グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※13.6 △5.5	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色～浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1555
183	第57図 —	I18グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※15.2 △5.8	口縁～体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		2371
184	第57図 —	I18グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※15.9 △5.2	口縁～体部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、頸～体部ハケ→ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ナデ・指オサエ	径2mm以下の灰・白色砂粒	外面：黄～にぶい黄褐色 内面：黄褐色	良好		2366
185	第57図 PL.37	I18グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※15.8 △6.7	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		503
186	第57図 PL.36	I18グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※14.4 △7.4	口縁～体部 1/4	外面：口縁部1条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部指オサエ・ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1547
187	第57図 PL.37	I18グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※20.0 △5.3	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸～体部ハケ・ナデ 内面：口縁～体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：黄褐色 内面：明黄褐色	良好		2367
188	第57図 PL.36	I17グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※18.4 △4.9	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		2169
189	第57図 PL.32	G16グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※14.6 △3.4	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部風化により調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		3219
190	第57図 PL.32	G16グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※14.2 △2.4	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、体部風化により調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		3218
191	第57図 PL.32	G16グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※19.0 △3.5	口縁～体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部刻目貼付突帯・ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		3214
192	第57図 PL.37	I17グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※25.6 △2.8	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部刻目貼付突帯・ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1561
193	第57図 —	I17グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※28.2 △2.5	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部5条凹線文、頸部ナデ・ハケ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		153
194	第57図 PL.37	I15グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※24.4 △2.7	口縁部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：橙色	良好		598
195	第57図 PL.36	I18グリッド Ⅲ層	弥生土器 高坏	※22.0 △3.0	脚～体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、体部1条凹線文 内面：口縁～体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	良好	外面赤色塗彩	540
196	第57図 PL.37	I16グリッド Ⅲ層	弥生土器 高坏	※12.4(底) △6.6	脚～裾部 1/6	外面：脚部三角透孔、裾部3条凹線文 内面：脚部ケズリ、裾部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：黄褐色	良好		3224
197	第57図 PL.36	I18グリッド Ⅲ層	弥生土器 高坏	※12.0(底) △3.7	脚～裾部 1/4	外面：脚部ハケ→ナデ、裾部2条凹線文 内面：脚部ケズリ、裾部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：赤～黄褐色 内面：黄褐色	良好	外面赤色塗彩	527
198	第57図 PL.37	I15グリッド Ⅲ層	弥生土器 壺	※6.9(底) △11.9	底部 1/2	外面：底部ナデ、底部ナデ 内面：底部ハケ・ケズリ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1772

表9 梅田萱峯遺跡2区出土土製品・焼成粘土塊観察表

No	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種別	調整・文様	色調	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げNo
6	第10図 PL.23	SI12 1層	紡錘車	外面：ハケ 内面：ハケ	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	△3.8	△3.4	0.4	0.5	1171
52	第23図 PL.26	SK62	焼成 粘土塊	外面：細かい亀裂 内面：吸炭している	外面：にぶい黄褐色～褐灰色 内面：灰黄褐色～にぶい黄褐色	3.3	2.7	1.8	10.4	1998
53	第23図 PL.26	SK62	焼成 粘土塊	外面：細かい亀裂 内面：吸炭している	外面：黄褐色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	3.3	2.9	1.6	10.8	1951
152	第45図 PL.33	SK72	紡錘車	外面：ハケ・ミガキ 内面：ナデ	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	△5.5	△3.3	0.6	10.8	2869
199	第57図 PL.37	I18グリッド Ⅲ層	注口部	外面：ハケ→ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	3.6	4.4	4.5	—	530

表10 梅田萱峯遺跡2区出土石器観察表(1)

No	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo
S1	第10図 PL.38	SI12-P1 8層	石鏃	サヌカイト	1.3	1.3	0.3	0.6	1747
S2	第10図 PL.38	SI12 4層	石鏃未成品	サヌカイト	1.6	1.4	0.25	0.6	1660
S3	第10図 PL.38	SI12 1層	剥片	緑色凝灰岩	3.15	4.05	1.0	8.7	1618
S4	第10図 PL.38	SI12 床直	碎片	緑色凝灰岩	1.7	1.3	0.4	0.7	1652
S5	第10図 PL.38	SI12 4層	碎片	緑色凝灰岩	1.45	2.15	0.4	0.8	1658

表7 梅田菅峯遺跡2区出土土器観察表(4)

遺物No	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
122	第40図 PL.32	SK70	弥生土器 高坏	※20.1 △1.9	口縁部 1/4	外面：口縁部2条凹線文、口縁部2条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の灰色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		617
123	第40図 PL.32	SK70	弥生土器 甕	※12.0(底) △3.4	脚部 1/4	外面：脚部多条沈線、裾部2条凹線文 内面：脚部上半ケズリ・下半ナデ	径2mm以下の白・灰色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		2281
124	第40図 PL.32	SK70	弥生土器 甕・壺?	※5.0(底) △4.2	底部 1/1	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底面ナデ	径3mm以下の白・灰色砂粒	外面：黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		2255
125	第42図 PL.32	SK71	弥生土器 甕	※12.9 △3.7	口縁～体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	良好		2697
126	第42図 PL.32	SK71	弥生土器 甕	※17.7 △3.7	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好		2728・2732
127	第42図 PL.32	SK71	弥生土器 甕	※17.6 △3.9	口縁～体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ・指オサエ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好	外面スス附着	2736
128	第42図 PL.32	SK71	弥生土器 甕	※16.0 △2.8	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部刻目貼付突帯・ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		2705
129	第42図 PL.32	SK71	弥生土器 壺	※20.9 △2.4	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部5条凹線文、頸部ナデ・ハケ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		3229
130	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 埋土	※15.2 △4.1	口縁～体部 1/8	外面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：黄褐色	良好		2869
131	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 甕	※15.4 △5.1	口縁～体部 1/8	外面：口縁部風化のため調整不明、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐～にぶい赤褐色 内面：浅黄褐色	良好		3111
132	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 埋土	※11.4 △5.3	口縁～体部 1/8	外面：口縁部風化のため調整不明、頸部ナデ、体部調整不明 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		2869
133	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 9層	※12.2 △7.2	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐色 内面：黄褐色	良好		3147
134	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 11層	※18.0 △5.3	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐～浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		3161
135	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 7層	※14.4 △2.0	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		3109
136	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 埋土	※16.2 △3.4	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部調整不明 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		3171
137	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 埋土	※17.0 △4.6	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		2869
138	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 11層	※17.7 △1.4	口縁部 1/8	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		3152
139	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 11層	※20.6 △5.5	口縁～体部 1/6	外面：口縁部4条凹線文、頸部指頭圧痕貼付突帯・ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好		3166
140	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 埋土	※21.9 △5.9	口縁～体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部刻目貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ→ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		2869
141	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 2層	※21.1 △2.2	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部指頭圧痕貼付突帯・ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		2919
142	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 5層	※22.2 △2.6	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部刻目貼付突帯・ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の灰色砂粒	外面：褐色 内面：黄褐色	良好		3106
143	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 埋土	※9.6 △4.6	口縁～頸部 1/4	外面：口縁部1条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ・指オサエ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		2869
144	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 埋土	※17.3 △2.9	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、体部ナデ 内面：口縁～体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黒色 内面：灰白色	良好		2656
145	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 高坏	※16.3 △2.8	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、口縁部4条凹線文、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の灰色砂粒	外面：赤褐色 内面：浅黄褐色	良好	外面赤色塗彩	3146
146	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 高坏	※15.4(底) △4.1	脚部 1/6	外面：脚部風化のため調整不明 内面：脚部風化のため調整不明	径3mm以下の灰色砂粒	外面：褐～黄褐色 内面：褐～黄褐色	良好		2922
147	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 高坏	※13.6(底) △11.0	脚部 1/5	外面：脚部多条沈線文、三角形1段透孔、裾部ナデ 内面：脚部ケズリ・ナデ、裾部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：淡黄色	良好		3114・3151
148	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 高坏	※16.0(底) △7.5	脚部 1/5	外面：脚部ハケ・ナデ、裾部3条凹線文・円形浮文 内面：脚部ケズリ・ナデ、裾部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄色 内面：黒色	良好		3117・3153・3164
149	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 1・2層	※5.4(底) △4.4	底部 1/2	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部風化のため調整不明	径1mm以下の灰色砂粒	外面：黒褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		2864・2866
150	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 甕・壺?	※5.4(底) △5.1	底部 1/3	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ケズリ	径1mm以下の灰色砂粒	外面：灰黄色 内面：暗灰黄色	良好	外面スス附着	3120
151	第45図 PL.33	SK72	弥生土器 埋土	※6.6(底) △2.7	底部 1/2	外面：底部ハケ、底面ナデ 内面：底部ハケ	径1mm以下の黒色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		3171
153	第47図 色相図表2	SX16	弥生土器 壺	33.8 61.7	口縁～底部 1/1	外面：口縁部3条凹線文、頸部ハケ→ナデ、体部ハケ→ナデ、体部ハケ→ナデ、体部ハケ→ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ→ナデ、体部ハケ→ナデ、体部ハケ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：明黄褐色	良好		3292・3293・3294・3295・3296・3297・3298・3299・3300・3301・3302・3303
154	第49図 一	P154	弥生土器 甕	16.0 △25.1	口縁～体部 1/3	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部上半ハケ・下半ミガキ 内面：口縁～頸部ナデ、体部上半ハケ・下半ハケ→ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐～褐色 内面：褐色	良好		3299・3285・3291・3292・3294・3299・3301・3302・3305
155	第49図 PL.34	P154	弥生土器 甕	※20.0 △7.4	口縁～体部 1/5	外面：口縁部3条凹線文、頸部刻目貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好		3254
156	第53図 PL.34	P186	弥生土器 甕	※15.6 △2.1	口縁部 1/5	外面：口縁部2条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		3243
157	第56図 PL.38	G15グリップ II層	弥生土器 甕	※19.0 △6.8	口縁～体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ミガキ	径1mm以下の灰色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		579
158	第56図 PL.36	H6グリップ II層	弥生土器 甕	※17.0 △5.0	口縁～体部 1/8	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部風化のため調整不明	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好		121
159	第56図 PL.37	G16グリップ II層	弥生土器 壺	※15.2 △3.2	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部1条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の灰色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		12
160	第56図 PL.36	H5グリップ II層	弥生土器 甕	※18.0 △2.0	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		581
161	第56図 PL.37	G17グリップ II層	弥生土器 甕	※18.0 △3.8	口縁～体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部風化のため調整不明 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		87
162	第57図 PL.36	H4グリップ II層	弥生土器 甕	※17.7 △2.9	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部指頭圧痕貼付突帯 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1797
163	第57図 PL.36	H8グリップ III層	弥生土器 甕	※15.9 △2.9	口縁～体部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部刻目貼付突帯 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		548
164	第57図 PL.36	H7グリップ II層	弥生土器 甕	※19.0 △3.7	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部刻目貼付突帯 内面：口縁～頸部風化により調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		24
165	第57図 PL.36	H5グリップ II層	弥生土器 甕	※18.4 △3.2	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部風化により調整不明、頸部指頭圧痕貼付突帯 内面：口縁～頸部風化により調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄色	良好		1772
166	第56図 PL.38	H7グリップ II層	弥生土器 壺	※20.4 △14.7	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ・ハケ・2条貼付突帯 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ・ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：暗灰黄～明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		200
167	第56図 PL.37	G16グリップ II層	弥生土器 甕	※17.6 △2.0	口縁～体部 1/8	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ハケ→ナデ	径1mm以下の灰色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		7
168	第56図 PL.37	G18グリップ II層	弥生土器 壺	— △5.7	頸部 1/8	外面：頸部ハケ・ナデ 内面：頸部ハケ・ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	内外面タール付着	571
169	第56図 PL.36	H6グリップ II層	弥生土器 壺	※29.4 △3.6	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部4条凹線文、頸部1条貼付突帯・ナデ 内面：口縁部6条柳描波状文・柳描文	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：褐色	良好		118
170	第56図 PL.37	G16グリップ II層	弥生土器 壺	※25.8 △4.2	口縁～頸部 1/8	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ・ハケ 内面：口縁～頸部ハケ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：暗灰黄色 内面：にぶい黄褐色	良好		2792・2795

表11 梅田萱峯遺跡2区出土石器観察表(2)

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S6	第10図 PL.38	SI12-P1 8層	碎片	緑色凝灰岩	1.8	1.7	0.5	1.5	1758
S7	第14図 PL.38	SI13-P3 埋土中	両極剥離を施した 石鏃素材剥片	サヌカイト	1.80	1.75	0.55	1.9	2140
S8	第14図 PL.38	SI13 2層	石包丁	サヌカイト?	△3.1	△4.7	△0.8	9.8	1202
S9	第14図 PL.39・40	SI13 2層	砥石	細粒花崗岩	5.9	3.9	2.2	97.5	1344
S10	第14図 PL.39・40	SI13 埋土中	砥石	細粒花崗岩	△2.1	△3.85	△1.7	10.6	1111
S11	第14図 PL.39・40	SI13-P6 埋土中	砥石	細粒花崗岩	9.2	5.9	6.5	360.0	1764
S12	第14図 PL.39	SI13 2層	敲石	安山岩	12.6	6.75	4.9	540.0	1184
S13	第16図 PL.38	SI14 1層	石核	黒曜石	2.4	2.9	2.0	15.2	222
S14	第16図 PL.38	SI14 検出面	スクレイパー	黒曜石	△3.15	△2.9	△0.8	7.4	2236
S15	第23図 PL.38	SK62 1層	石鏃	サヌカイト	3.4	1.9	0.35	1.9	1976
S16	第23図 PL.38	SK62 1層	石鏃	サヌカイト	3.45	1.95	0.35	1.8	1857
S17	第23図 PL.38	SK62 検出面	石鏃	サヌカイト	3.85	1.8	0.5	3.2	526
S18	第23図 PL.38	SK62 1層	石鏃素材剥片	サヌカイト	2.6	1.7	0.35	2.1	1929
S19	第23図 PL.38	SK62 1層	研磨痕のある 剥片	サヌカイト	3.3	2.2	0.3	2.4	1859
S20	第25図 PL.38	SK63 2層	石鏃	サヌカイト	3.25	1.9	0.7	2.4	2975
S21	第25図 PL.38	SK63 1層	石鏃素材剥片	サヌカイト	3.25	5.1	1.15	17.4	2870
S22	第25図 PL.40	SK63 2層	砥石	安山岩	△15.4	△8.5	△9.95	2200.0	3079
S23	第29図 PL.38	SK65 1層	石鏃	サヌカイト	3.55	1.8	0.5	2.3	698
S24	第31図 PL.39	SK66 検出面	敲石	安山岩	9.45	6.5	3.1	280.0	254
S25	第36図 PL.38	SK68 1層	石鏃	サヌカイト	△2.5	1.0	0.25	0.9	2486
S26	第40図 —	SK70 1層	石錘	安山岩	△8.75	△6.15	△4.9	260.0	613
S27	第42図 PL.38	SK71 1層	二次加工の桂 化木破片	桂化木	7.6	3.5	1.9	42.2	2720
S28	第42図 PL.40	SK71 1層	磨石	安山岩	4.7	3.45	2.4	57.0	2712
S29	第54図 PL.39	P172 埋土中	敲石	安山岩	9.2	10.15	4.2	580.0	3233
S30	第58図 PL.38	— 攪乱土	石鏃	黒曜石	△2.1	△1.0	0.25	0.6	229
S31	第58図 PL.38	G18グリッド Ⅲ層	石鏃	サヌカイト	2.25	1.7	0.25	1.1	568
S32	第58図 PL.38	G16グリッド Ⅱ層	石鏃	サヌカイト	2.2	1.3	0.35	1.2	2812
S33	第58図 PL.38	H18グリッド Ⅲ層	赤色顔料素材		3.45	2.65	1.65	19.6	553
S34	第58図 PL.39・40	I14グリッド Ⅲ層	砥石	アブライト	△2.9	△2.55	△0.9	7.3	1795
S35	第58図 PL.39	I17グリッド Ⅱ層	磨石	安山岩	9.45	4.0	2.2	120.0	57
S36	第59図 PL.39	F16グリッド 表土	敲石	安山岩	8.4	6.35	5.1	310.0	429
S37	第59図 PL.39	I17グリッド Ⅱ層	敲石	安山岩	16.4	7.7	4.6	690.0	151
S38	第59図 PL.39	H18グリッド Ⅲ層	敲石	安山岩	11.0	5.1	3.8	300.0	564
S39	第59図 PL.40	H17グリッド Ⅱ層	台石	安山岩	25.7	28.6	6.8	7420.0	1770

第4章 自然科学分析の成果

第1節 梅田萱峯遺跡2区出土炭化材樹種同定

株式会社古環境研究所

(1)はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2)試料

試料は、梅田萱峯遺跡2区で検出された製炭土坑SK61出土の炭化材2点である。時期は不明である。

(3)方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4)結果

結果を表12に示し、顕微鏡写真を写真3に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 写真3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

(5)所見

同定の結果、梅田萱峯遺跡2区出土の炭化材2点は、どちらもコナラ属クヌギ節であった。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯に広く分布する落葉広葉樹で乾燥した台地や丘陵地に生育し二次林要素でもある。材質は弾力に富んだ強い材である。優良な木炭となる樹種で、選択的に用いられたとみなされる。遺跡周辺の乾燥した台地や丘陵地にコナラやクリなどとともに二次林を形

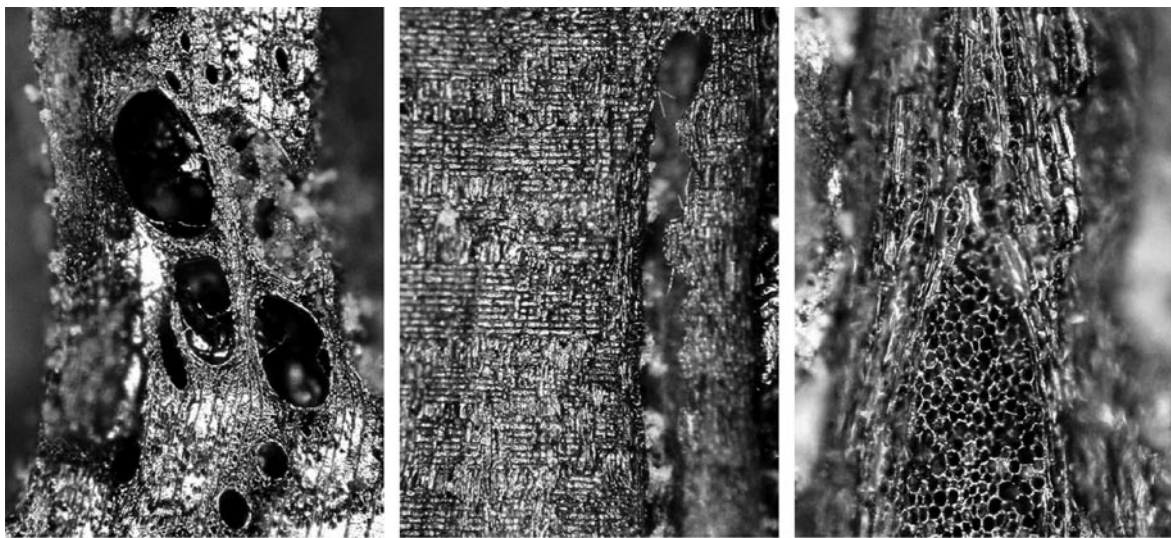
成していた可能性が高く、遺跡周辺からもたらす事の出来る樹種であったと考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242

表12 梅田萱峯遺跡2区における樹種同定結果

試料No.	遺構名	取上げNo.	備考	結果(学名/和名)	
1	SK61	667	時期不明、製炭土坑	<i>Quercus sect. Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
2	SK61	668	時期不明、製炭土坑	<i>Quercus sect. Aegilops</i>	コナラ属クスギ節



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.4mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 試料No.1 コナラ属クスギ節

写真3 梅田萱峯遺跡2区出土炭化材

第2節 梅田萱峯遺跡2区出土炭化材放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

(1)はじめに

ここでは、梅田萱峯遺跡2区で出土した製炭土坑から採取された炭化物について放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代を推定した。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc. の協力を得た。

(2)試料と方法

測定試料は、土器を伴わない製炭土坑(SK61)から採取された炭化物1点である。これら試料は、二次的に混入した有機物を取り除くために、蒸留水中で細かく粉碎し、超音波洗浄および煮沸洗浄を行った。次に塩酸(HCl)により炭酸塩を除去した後、水酸化ナトリウム(NaOH)により二次的に混入した有機酸を除去した。さらに塩酸(HCl)で洗浄し、最後にアルカリによって中和した。これら前処理をした試料は、定温乾燥機内で80℃で乾燥した。

乾燥後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス・メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。

これらのターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表13にまとめた。

表13 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SK61	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS(Accelerator Mass Spectrometry)は加速器質量分析法

表14 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C年代 ¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 ³⁾ (年BP)	暦年代(西暦) ⁴⁾
No.1	224335	1460 ± 40	- 27.7	1420 ± 40	交点 : cal AD 640
					1 σ : cal AD 610 ~ 650
					2 σ : cal AD 570 ~ 660

(3)結果

年代測定の結果を表14に示す。

1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3)補正¹⁴C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサングのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を用いる。今回暦年代較正に使用したプログラムは、CALIB5.0.2である。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率)と2 σ (95%確率)は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。暦年代範囲の後のカッコ内の百分率の値は、その暦年代範囲の確からしさ(確率分布)を示し、10%未満については省略した。

(4) 所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに暦年代較正を行った結果、試料1は1420 \pm 40年BP(2 σ の暦年代でAD 570～660年)の年代値が得られた。

参考文献

Paula J Reimer, Mike G L Baillie, Edouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Chanda J H Bertrand, Paul Glackwell, Caitlin E Buck, George S Burr, Kirsten B Cutler, Paul E Damon, R Lawrence Edwards, Richard G Fairbanks, Michael Friedrich, Thomas P Guilderson, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, Bernd Kromer, Gerry McCormac, Sturt Manning, Christopher Bronk Ramsey, Ron W Reimer, Sabine Remmele, John R Southon, Minze Stuiver, Sahra Talamo, FW Taylor, Johannes van der Plicht, Constanze E Weyhenmeyer. 2004. INTCAL04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon 46:1029-1058.

第5章 総括

梅田萱峯遺跡2区からは弥生時代中期後葉の竪穴住居(建物)跡3棟、掘立柱建物跡2棟、段状遺構1棟、土器棺墓1基、貯蔵穴2基、土坑11基、ピット45基、7世紀中頃から7世紀後半代の製炭土坑1基を検出した。広域農道を挟んだ1区とは同一集落と考えられ、平成17・18年度調査成果分を合わせると竪穴住居(建物)跡14棟、掘立柱建物跡2棟、段状遺構4棟、貯蔵穴11基、土坑56基、土坑墓・木棺墓・土器棺墓16基、土器溜り4ヶ所、ピット179基となる。

2区から出土した遺物は縄文土器1点を除き、すべては弥生時代中期後葉に該当するものであり、旧石器・縄文時代から古代の遺物が出土した1区とはやや様相を異にしている(註1)。また、南西方向の尾根部に当たる3区では縄文時代の可能性を持つ落とし穴7基が検出されており、1・2区の尾根部は合わせてわずか3基に留まる。このことから縄文時代から弥生時代前期の土地利用は低調であったことがわかる。2区で本格的な居住が始まるのは弥生時代中期後葉であり、竪穴住居(建物)、掘立柱建物、貯蔵穴、土坑から構成される。なかでも1区では見られない掘立柱建物跡が2区では2棟確認されていることは注目されよう。3区ではⅣ-2・3期に比定される独立棟持柱付掘立柱建物を含む4棟が尾根頂部で築かれているが、2区ではこれに先駆けてⅣ-1期で認められるからである。立地は竪穴住居(建物)から4～5m離れた丘陵平坦面であり、集落内の空間分節によって計画的に配されていたと考えられる。さらに、墓域の一角を示すと想定される礫群や土器棺墓SX16が調査区北半の1区寄りから検出されていることから、墓域を挟んだ居住域・貯蔵域といった集落景観の一端を明らかにできたことは重要な成果といえよう。土器棺墓は円礫と柱状礫を標石として下部に口径33.8cm、器高61.7cmの壺が土坑掘り方を覆うように埋設されていた。県内における弥生時代中期の土器棺墓の事例として長瀬高浜遺跡SXY01、東宗像遺跡第1号土器棺墓が知られているに過ぎず、本例は1個体の土器を割って土坑の蓋として使用した後者に近い(註2)。本遺跡からは、これまでに木棺墓13基、土坑墓2基が確認されているが、墓坑形態や標石の有無などが多様なあり方を示している(註3)。新たに加わった土器棺墓によってもその見方は可能であり、さらに南に拡がる可能性が高い集落全体の様相が明らかになった後、再度検討を行いたいと考えている。

出土遺物からみた2区の特徴として、SI12において1区では見られなかった管玉製作に伴う資料が出土していることが挙げられよう。本遺跡ではⅣ-1期には玉作りが始まっていたことを示し、Ⅳ-2・3期に形成される3区へと継続している。また、住居跡の周囲に小型の土器廃棄土坑が点在していることも興味深い事例であり、これらが何を示すのか今後の検討課題である。

以上、梅田萱峯遺跡2区の調査成果の概要をまとめたが、今後予定されている南側丘陵部の調査によってさらに当該期の集落像が具体的に描けるものと思われる。

【参考文献】

- 1) 高尾浩司・浅田康行編2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書11 梅田萱峯遺跡Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター
湯村 功・小口英一郎・濱本利幸編2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書16 梅田萱峯遺跡Ⅱ』
鳥取県埋蔵文化財センター
- 2) 吉田 学2000「山陰東部における古墳時代の土器棺、土器棺墓の様相」『大山町埋蔵文化財調査報告書第17集 妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅳ<洞ノ原・松尾城地区>』鳥取県大山町教育委員会
- 3) 註1 報告書参照。